

# 2020 年度 IR 推進委員会報告書

仙台白百合女子大学

2020年度のIR推進委員会では、①教育課程・学習成果に関するIR、②学生の出口（就職）に関するIR、③学生の受け入れに関するIR、④GPA・授業評価アンケートに関するIR等に取り組むこととした。それぞれに担当者(WG)を決め、WGが取り組むべき具体的な課題を設定して調査を行うこととしていたが、年度途中で2020年度内部質保証関連重点事項に関する項目が示されたため、若干IRのテーマに変更を生じることとなった。よって、最終的に、本報告書の構成は次の通りとなった。

#### 第1部 教育課程・学習成果に関するIR

- ・1年生(新入生)の高校時の成績とリテラシーとコンピテンシーとの相関関係
- ・4年生(卒業生)の総合GPAとディプロマ・ポリシーの相関関係

#### 第2部 学生の出口（就職）に関するIR

- ・PROGテストスコアおよびGPAスコアからの就職先の予測：判別分析(全体)
- ・PROGテストスコアおよびGPAスコアからの就職先の予測：判別分析(学科別)

#### 第3部 学生の受け入れに関するIR

- ・北海道・東北地方の地域別受験生の動向について

#### 第4部 2020年度内部質保証関連重点事項に関するIR

- ・ディプロマ・ポリシーに基づいた学修成果の把握について
- ・年度別就職先の変化について

## I 調査の目的

2020 年度における IR の一環として、学生の特性に応じて教育課程の実施要領を検討し、大学 4 年間の教育・学習成果を検証するために、「学生の入学時の基本状況に基づく教育課程の検討」と「ディプロマ・ポリシーに基づいた教育・学習成果の把握」という二つの目的を設定して、PROG(Progress Report on Generic Skills)テストの結果を用いて分析と考察を行った。分析する際に用いたデータは、2020 年 2 月に 4 年生を 5 月に 1 年生を対象として実施された PROG テストの結果である。なお、この 2 回の PROG テストの結果は 2020 年 9 月 17 日に開催された PROG テストの教職員向けの解説会で説明されたものであるため、PROG テストで測られる各種の能力と詳細な調査項目及び結果については、説明会で配布された資料(データ)を参照してもらいたい。

## II 調査の手続き

IR に関する取り組みを進めるにあたって、2020 年度に入学した 4 学科の 1 年生と 2019 年度に卒業した 4 学科の 4 年生を対象として、調査活動を展開した。

まず、2020 年度に入学した 4 学科の 1 年生が出身高校で付けられた科目評定の平均値と PROG テストにおけるリテラシーとコンピテンシーの得点との関係性を分析した。分析の結果を用いて学生の入学時の成績と能力の状況に基づく教育課程の実施要領を検討した。次に、2019 年度に卒業した 4 年生を対象に、学部及び 4 学科のディプロマ・ポリシーに対応した PROG テストの得点を算出し、その得点と 4 年間の総合 GPA との関係性を分析することで、学部と学科ディプロマ・ポリシーに基づいて大学教育の教育・学習成果を把握した。

調査結果の妥当性と信憑性を保障するために、PROG テストの得点と総合 GPA において欠損値があったサンプルを全て分析対象から除外した。なお、SPSS Statistic27 を用いてデータの統計的処理を行った。

## III 調査の結果

### 1. 1 年生(新入生)の高校時の成績とリテラシーとコンピテンシーとの相関関係

#### ① 高校時の成績とリテラシー・コンピテンシーとの一般的な相関関係

PROG テストにおいて、「知識を活用して課題を解決する力(≒思考)」としての「リテラシー」と「経験を積むことで身につく行動特性(≒態度・技能)」としての「コンピテンシー」という 2 種類の「基礎力」が測定された。この基礎力は現代社会において求められる一般的な能力であるため、大学の専門教育で育成する能力と必ずしも合致しないが、大学の教育方針によっては、両者の間に共通する要素もある。さらに、大学の専門教育の実施要領や教育・学習効果を検討及び検証する際に、学生の持っている一般的な能力が重要な指標として役割を果たすことも考えられる。このことから、本調査は、2020 年度に入学した 1 年生を対象として、高校時の成績状況を示す評定平均値(以下は「高校評点」と)と PROG テストの得点と相関分析を行い、1 年生の入学時の成績と各学生の持っている基礎力との関係性を考察することにした。

表 1 に示したように、4 学科すべてにおいて、高校評点と学生のリテラシー総得点の間に有意な相関関係が得られたが、関係性 ( $r=.148, p<.05$ ) はかなり弱いものであった。また、高校評点と学生のコンピテンシー総得点の間に有意な相関関係がないことも確認された。また、学科ごとの相関分析の結果を表 2 から表 5 まで示した。表 2、表 3、表 4、表 5 の数値から、健康栄養学科のみにおいて高校評点とコンピテンシー総得点の間に弱い関係性 ( $r=.253, p<.05$ ) が確認されたが、その他 3 学科のいずれにおいても、高校評点とリテラシーとコンピテンシー総得点の有意な相関関係が確認されなかった。

以上の分析から、4 学科の全体において高校評点の高い学生ほどリテラシーの総得点が高いという関係性が一定の程度において確認されたが、健康栄養学科のみにおいて、高校評点の高い学生ほどリテラシーの総得点も高いという相関関係が結果としてあげられた。

表 1 【4 学科】 高校評点とリテラシー総合・コンピテンシー総合との相関関係

	1.リテラシー総合	2.コンピテンシー総合	3.高校評点
1.リテラシー総合	—		
2.コンピテンシー総合	-.148*	—	
3.高校評点	.178**	-.01	—

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 2 【人間発達学科】

	1	2
1.リテラシー総合	—	
2.コンピテンシー総合	-.425**	—
3.高校評点	.126	.046

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 3 【心理福祉学科】

	1	2
1.リテラシー総合	—	
2.コンピテンシー総合	-.051	—
3.高校評点	.093	-.015

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 4 【健康栄養学科】

	1	2
1.リテラシー総合	—	
2.コンピテンシー総合	-.010	—
3.高校評点	.253*	.064

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 5 【グローバル・スターディズ学科】

	1	2
1.リテラシー総合	—	
2.コンピテンシー総合	-.150	—
3.高校評点	.139	-.118

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

## ② 高校時の成績と関係性の高いリテラシーとコンピテンシー

PROG テストにおいて測定されたリテラシーとコンピテンシーは、それぞれ「情報収集力、情報分析力(言語処理能力/非言語処理能力)、課題発見力、構想力」と「対人基礎力(親和力/協働力/統率力)、対自基礎力(感情制御力/自信創出力/行動持久力)、対課題基礎力(課題発見力/計画立案力/実践力)」の計 14 種類の能力によって構成されている。リテラシーとコンピテンシーにおいて、高校時の成績と強い関係性をもつ能力は、表 6 から表 8 まで示した通りである。なお、紙幅の関係で、有意な相関関係が確認されない学科と項目は省略している。

表 6 【4 学科】 高校評点と有意な相関関係をもつリテラシーとコンピテンシー

	1	2	3	4	5	6
1.リテラシー〔課題発見力〕	—					
2.リテラシー〔構想力〕	.285**	—				
3.対人基礎力〔統率力〕	-.122	-.068	—			
4.対人基礎力〔統率力:意見の調整、交渉、説得〕	-.131	-.054	.795**	—		
5.対自己基礎力〔自信創出力:独自性理解〕	-.042	.026	.430**	.307**	—	
6.対課題基礎力〔実践力:検証/改善〕	.075	.160*	.018	.023	.196**	—
7.高校評点	.171*	.147*	-.136*	-.145*	.143*	.150*

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 6 に示した相関関係から、4 学科の 1 年生全員において、高校時の成績が高いほど、「リテラシー〔課題発見力〕 ( $r=.171, p<.05$ )」「リテラシー〔構想力〕 ( $r=.147, p<.05$ )」「対自己基礎力〔自信創出力:独自性理解〕 ( $r=.143, p<.05$ )」「対課題基礎力〔実践力:検証/改善〕 ( $r=.150, p<.05$ )」の 4 種類の能力が高くなり、逆に「対人基礎力〔統率力〕 ( $r=-.136, p<.05$ )」、特に「対人基礎力〔統率力〕」の「〔統率力:意見の調整、交渉、説得〕 ( $r=-.145, p<.05$ )」という能力が低くなることが確認される。ただ、高校評点と各種の能力の間に確認された有意な相関関係の関係性はいずれも低い数値になったため、高校時の成績と各種の能力との関係性を絶対視することを避けるべきであろう。

表 7 【人間発達学科】 高校評点とリテラシー・コンピテンシーとの有意な相関関係

	1	2
1.対自己基礎力〔自信創出力〕	—	
2.対自己基礎力〔自信創出力:自己効力感/楽観性〕	.814**	—
3.高校評点	.326*	.320*

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 8 【健康栄養学科】 高校評点とリテラシー・コンピテンシーとの有意な相関関係

	1	2	3
1.リテラシー〔課題発見力〕	—		
2.対自己基礎力〔感情制御力:セルフアウェアネス〕	-.129	—	
3.対課題基礎力〔課題発見力:原因追究〕	-.169	.147	—
4.高校評点	.285*	-.274*	-.247*

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

1 年生の得点を学科ごとで分析した結果、人間発達学科と健康栄養学科の 2 学科のみにおいて有意な相関関係が得られた。表 7 に示したように、人間発達学科の 1 年生において、高校時の成績が高いほど「対自己基礎力〔自信創出力〕 ( $r=.326, p<.05$ )」特に「対自己基礎力〔自信創出力:自己効力感/楽観性〕 ( $r=.320, p<.05$ )」という能力が高くなる傾向が確認された。また、表 8 に示したように、健康栄

養学科の1年生において高校時の成績が高いほど「リテラシー〔課題発見力〕 ( $r=.285, p<.05$ )」が高くなり、「対自己基礎力〔感情制御力:セルフアウェアネス〕 ( $r=.274, p<.05$ )」と「対課題基礎力〔課題発見力:原因追究〕 ( $r=.247, p<.05$ )」が逆に低くなる傾向も確認された。

## 2. 4年生(卒業生)の総合 GPA とディプロマ・ポリシーの相関関係

### ① PROG テストの結果と学部及び学科のディプロマ・ポリシーの対応関係

PROG テストの結果を用いてディプロマ・ポリシーの達成度、そして大学教育の教育・学習成果を検証するために、学部及び4学科のディプロマ・ポリシーの中身と照合した上で、該当する PROG テストの質問項目を抽出し、卒業時における学生のディプロマ・ポリシーの得点が算出されていた。なお、学部及び4学科のディプロマ・ポリシーに対応した PROG テストの得点の基本的な状況は、既に2020年9月17日に開催された教職員向けの解説会で解説されたため、詳細の情報は説明会で配布された資料(データ)を参照してもらいたい。

しかし、前述のように、PROG テストで測定されたリテラシーとコンピテンシーといった基礎力は現代社会で求められる一般的な能力であるため、大学の専門教育で育成される能力と必ずしも合致するわけではない。このような理由で、実際に学部ディプロマ・ポリシーの第1条「建学の精神に則り、カトリック及びキリスト教について理解しており、その精神に基づいた世界観や人間観及び知識・能力を身につけていることを学位授与の条件とする」や人間発達学科ディプロマ・ポリシーの第1条「教育・保育に関する様々な専門領域の学習を通して、人間科学としての教育学・保育学の基礎を身につけている」といった専門的な能力を測定できる PROG テストの項目が存在しないという検証手続き上の問題が浮上してくる。

勿論、大学のディプロマ・ポリシーや教育方針によっては、各専門領域に特化した専門的な能力と現代社会で求められる一般的な能力の間に共通する要素もあるため、上記の検証手続き上の問題を考慮すれば、大学教育の教育・学習効果を検討する際に、専門的な能力と一般的な能力の両者を用いた方の妥当性が高いと考えられる。ここで大学における専門教育の達成度を示す学生の総合 GPA(4年間)を投入して、学生の総合 GPA とディプロマ・ポリシーに対応した PROG テストの得点の相関関係を分析することにした。

### ② 総合 GPA と学部及び学科ディプロマ・ポリシーとの相関関係

4学科の4年生を対象に、学部及び学科のディプロマ・ポリシーに対応した PROG テストの得点を算出し、PROG テストの得点で表したディプロマ・ポリシーの数値と4年間の総合 GPA の相関関係は、表9から表13まで示した通りである。なお、「人間学部 D(2)」という表記は、人間学部ディプロマ・ポリシー第2条のことを意味する。各学科のディプロマ・ポリシーの表記も同様である。

表9に示した数値からは、学部ディプロマ・ポリシー第2条と第3条の項目関において有意な相関関係が確認されたが、いずれの項目も4年間の総合 GPA と有意な相関関係を持たないことも明らかになった。なお、相関関係が「1.000\*\*」になったディプロマ・ポリシー項目は、PROG テストの同じ質問項目の点数で算出されたため、項目間の関係性は必ずしも高いわけではない。

また、各学科のディプロマ・ポリシーと総合 GPA の相関関係を示した表10、表11、表12、表13の数値からは、学部のそのものと同様に、4学科のディプロマ・ポリシーにおけるいずれの項目も4年間の総合 GPA と有意な相関関係を持たないことが確認された。この結果をもたらした原因として、まず

専門的な能力と一般的な能力を測定する指標が異なることが推測されるが、PROG テストを受けた4年生の数が少ないため、PROG テストで収集された4年生のデータ自体に偏りが存在することも考えられる。

表9 総合 GPA と人間学部ディプロマ・ポリシーの相関関係

	1	2	3	4	5	6	7
1.人間学部 D(2) 発達した人間性	—						
2.人間学部 D(2) 創造力 (計画立案)	.260*	—					
3.人間学部 D(2) 判断力 (課題発見力)	.205	.362**	—				
4.人間学部 D(2) 実践力	.372**	.343**	.086	—			
5.人間学部 D(3) 判断力 (課題発見力)	.205	.362**	1.000**	.086	—		
6.人間学部 D(3) 思考力	-.215*	-.030	.030	.176	.030	—	
7.人間学部 D(3) 実践力	.372**	.343**	.086	1.000**	.086	.176	—
8.4年間総合 GPA	.140	.002	-.090	.177	-.090	.107	.177

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表10 総合 GPA と人間発達学科ディプロマ・ポリシーの相関関係

	1	2	3	4
1.人間発達学科 D(2) 成長発達を支える=統率力+振り返り力	—			
2.人間発達学科 D(3) コミュニケーション能力	.336**	—		
3.人間発達学科 D(3) 人間関係能力+使命感・責任感	.461**	.649**	—	
4.人間発達学科 D(4) ヒューマニズム	.336**	1.000**	.649**	—
5.4年間総合 GPA	.021	.049	.099	.049

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表11 総合 GPA と心理福祉学科ディプロマ・ポリシーの相関関係

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1.心福祉D(1) 計画し実践、汎用的能力 (リテ全般)	—								
2.心福祉D(2) 幸福とは何かを追求する能力	.064	—							
3.心福祉D(3) 市民の一人として(親和力?)倫理観	.121	.930**	—						
4.心福祉D(4) 間接的関わり(協働)と主体的	-.013	.904**	.683**	—					
5.心福心理D(1) 計画し実践、汎用的能力 (リテ全般)	1.000**	.064	.121	-.013	—				
6.心福心理D(6) 応用→実践する	.654**	.357**	.374**	.273*	.654**	—			
7.心福心理D(7) プレゼン・議論のコミュニケーション(統率力)	.397**	.209	.084	.316**	.397**	.127	—		
8.心福心理D(8) 自分自身の理解と成長	.085	.547**	.528**	.472**	.085	.435**	.113	—	
9.心福心理D(8) 他者との良好な人間関係	.058	.981**	.920**	.878**	.058	.322**	.172	.512**	—
10.4年間総合 GPA	.188	.107	.096	.100	.188	.108	.050	-.026	.068

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 12 総合 GPA と健康栄養学科ディプロマ・ポリシーの相関関係

	1	2	3
1.健康栄養学科 D(2) 課題への支援・対策&実践	—		
2.健康栄養学科 D(3) 信頼関係・人間関係	.161	—	
3.健康栄養学科 D(4) 得意分野を活かす→構想し実践する	.630**	.132	—
4.4 年間総合 GPA	.076	.045	.201

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 13 総合 GPA とグローバル・スタディーズ学科ディプロマ・ポリシーの相関関係

	1	2	3	4
1.グローバル・スタディーズ学科 D(1) 探求・角的理解	—			
2.グローバル・スタディーズ学科 D(2) 言語の理解力?	.424**	—		
3.グローバル・スタディーズ学科 D(3) 批判力(思考)と創造力	.224*	.061	—	
4.グローバル・スタディーズ学科 D(3) 主体的な行動力	.000	.007	.464**	—
5.4 年間総合 GPA	-.028	-.130	.050	.167

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

#### IV 調査結果による示唆

4 学科の新入生(1 年生)を対象に行った PROG テストと高校評点の相関分析から、高校時の成績が高いほど、「リテラシー [課題発見力]」「リテラシー [構想力]」「対自己基礎力 [自信創出力:独自性理解]」「対課題基礎力 [実践力:検証/改善]」の 4 種類の能力が高くなり、逆に「対人基礎力 [統率力]」、特に「対人基礎力 [統率力]」の「[統率力:意見の調整、交渉、説得]」という能力が低くなるということが一定の程度で確認することができた。この結果から、大学の教育課程において学生の専門性や一般的な能力を高める他にも、対人能力を育成することの重要性が窺える。実際の取り組みとしては、学生活動を活性化させるとともに、講義や演習といった教育活動においてアクティブラーニングを充実させることが考えられる。

また、4 学科の卒業生(4 年生)を対象に行った PROG テストと総合 GPA の相関分析から、学部と 4 学科のディプロマ・ポリシーにおけるいずれの項目も 4 年間の総合 GPA と有意な相関関係を持たないことが確認された。この結果から、学部及び 4 学科ディプロマ・ポリシーの達成度を高めることによって、大学教育の教育・学習効果を高めていくための取り組みを提案することはできないが、大学で育成する専門的な能力と現代社会で求められる一般的な能力の整合性に関する吟味、学生の学習状況に関する継続的なデータ収集といった教育・学習上の課題を再度確認することができた。

## はじめに

就職関連 IR では、「PROG テスト」、GPA (Grade Point Average) の 2 つのスコアが、希望通りの企業等から内定を得られたか否か（第一希望の就職先かそれ以外か）に影響を与えているのか、また、影響を与えている場合にはどの程度の影響力があるのかについて検討した。本報告では、以下の項目に関する分析を行った。

- ・「PROG テストスコア」（リテラシー総合スコア，コンピテンシー総合スコア，リテラシーの 4 つの力（情報収集力，情報分析力，課題発見力，構想力）のスコア，コンピテンシーの 3 つの力（対人基礎力，對自己基礎力，対課題基礎力）のスコア）
- ・GPA スコア（4 年間の総合 GPA）
- ・第一希望の企業等から内定を得ているか否か（以下，「就職先」）

## 目的

判別分析によって，GPA スコアや PROG テストスコアが就職先（第一希望の就職先に就職できるか否か）を予測可能か検証する。

## 1. PROG テストスコアと GPA スコア

まず PROG (Progress Report On Generic Skills) テストとは，学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発したジェネリックスキル（汎用的な能力・態度・志向）を測定するためのアセスメントプログラムである。PROG テストは，実践的に問題を解決に導く力である「リテラシー」と，周囲の環境と良い関係性を築く力である「コンピテンシー」の 2 つに大別されている。さらにリテラシーは，新しい問題やこれまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力を，情報収集力や情報分析力など 6 つに分類したうち「情報収集力」，「情報分析力」，「課題発見力」，「構想力」の 4 つの能力で測定するものである。コンピテンシーは，周囲の状況に上手に対応するために身につけた意思決定の特性や行動スタイルである「対人基礎力」，「対課題基礎力」，「對自己基礎力」の 3 つの能力で測定するものである。

また，GPA (Grade Point Average) スコアとは，授業科目ごとに評価された成績に対して段階ごとに GP (Grade Point) を付与し，単位当たりの平均を算出するものである。近年ではその一定水準を卒業や進級などの要件とする大学も増加している。また，就職での採用選考に GPA を参考にしてている企業も増えてきている。

## 2. PROG テストスコアおよび GPA スコアからの就職先の予測：判別分析（全体）

まず，基礎的データとして，全体と学科別の GPA スコアおよび PROG テストスコア（リテラシー，コンピテンシー）の平均値を Table 1 に示す。また，学科別の就職先情報（未提出・未回答者，その他を含む全データ）を Table 2，学科別の就職先情報（第一希望，第一希望以外のみ）を Table 3 に示す。

これらの基礎的データをもとに，GPA スコアや PROG テストスコア（リテラシー，コンピテンシー）が第一希望の就職先に就職できるか否かに影響を及ぼすのかを検討するため，就職先を基準変数，GPA スコア，PROG テストスコア（リテラシー，コンピテンシー）を説明変数とする判別分析を行った。なお，本分析では「第一希望」，「第一希望以外」の 2 通りの場合を分析対象としており，「未提出/未回答」や「その他」は含まない。

その結果，正準相関は有意でなかった ( $p=.21$ )。したがって，GPA スコアや PROG テストスコア（リ

テラシー、コンピテンシー)は第一希望の就職先か否かを決定するための要因とはならないことが示された。なお、本分析では統計的に有意な結果が得られなかったものの、参考までに全体的な傾向について述べる。標準化された正準判別関数係数を見ると、GPAが.07、PROG(リテラシー)が-.68、PROG(コンピテンシー)が.80であり、グループ重心の関数は「第一希望」で.14、「第一希望以外」で-.45であった。このことから、PROGテストスコア(コンピテンシー)が高いほど第一希望の内定が得られる傾向にあり、PROGテストスコア(コンピテンシー)が低くPROGテストスコア(リテラシー)が高いほど第一希望以外の内定が得られる傾向があった。これは、近年では社員の能力開発および採用面接におけるミスマッチ防止のため、コンピテンシーを重視する企業が増えていることと関連がある可能性がある。社会人としていわゆる「読み書き能力」であるリテラシーも最低限必要ではあるが、アメリカ文化情報局(USIA)の報告にもあるように、このような能力は必ずしも実際のパフォーマンスと相関がないことが明らかになっている。したがって、リテラシーよりもコンピテンシーの高い学生で第一志望の就職先から内定を得ている傾向があることが想定される。ただし、本報告は統計的に有意なデータに基づいたものではないため、参考程度に留めておく必要がある。

### 3. PROGテストスコアおよびGPAスコアからの就職先の予測：判別分析(学科別)

次に、学科によってGPAスコアやPROGテストスコア(リテラシー、コンピテンシー)が第一希望の就職先に就職しているか否か異なるかを検討するため、学科別に就職先を基準変数、GPAスコア、PROGテストスコア(リテラシー、コンピテンシー)を説明変数とする判別分析を行った。

その結果、すべての学科において正準相関は有意でなかった(人間発達学科  $p=.70$ ; 心理福祉学科  $p=.95$ ; 健康栄養学科  $p=.24$ ; グローバル・スタディーズ学科  $p=.88$ )。したがって、学科別に分析した場合でも、GPAスコアやPROGテストスコア(リテラシー、コンピテンシー)は第一希望の就職先か否かを決定するための要因とはならないことが示された。なお、本分析では統計的に有意な結果が得られなかったものの、参考までに全体的な傾向について述べる。まず、人間発達学科と心理福祉学科は傾向としては共通しており、標準化された正準判別関数係数を見ると、それぞれGPAが-.25、-.51; PROG(リテラシー)が-.36、-.20; PROG(コンピテンシー)が.94、.92であり、グループ重心の関数は「第一希望」でそれぞれ.07、.21; 「第一希望以外」で-.43、-.18であった。このことから、PROGテストスコア(コンピテンシー)が高いほど第一希望の内定を得ている傾向にあり、PROGテストスコア(コンピテンシー)が低くPROGテストスコア(リテラシー)が高いほど第一希望以外の内定を得ている傾向があった。

一方で、健康栄養学科は標準化された正準判別関数係数を見ると、GPAが.22、PROG(リテラシー)が.79、PROG(コンピテンシー)が.74であり、グループ重心の関数は「第一希望」で-.48、「第一希望以外」で1.27であった。このことから、PROGテストスコア(コンピテンシー)やPROGテストスコア(リテラシー)が高いほど第一希望以外の内定を得ている傾向があった。また、グローバル・スタディーズ学科は、標準化された正準判別関数係数を見ると、GPAが.81、PROG(リテラシー)が1.02、PROG(コンピテンシー)が.73であり、グループ重心の関数は「第一希望」で-.48、「第一希望以外」で-.72であった。このことから、PROGテストスコア(コンピテンシー)やPROGテストスコア(リテラシー)、GPAスコアが高いほど第一希望の内定を得ている傾向があった。

これらは、統計的に有意なものではないため過剰な解釈はできないものの、参考までに結果について考察してみたい。まず、人間発達学科と心理福祉学科でコンピテンシーが高くリテラシーが低いと第一志望の就職先から内定を得ている傾向があることに関しては、主な就職先が教育、対人援助サービスを中心とした職業であることが挙げられる。前者は幼保・小学校教諭として、後者は社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士など、人と深く関わる職業が求められる職業であると考えられる。その中ではリテラシーもさることながら、成果主義や能力主義とは異なる性格、動機、価値観といったコンピテンシーが重視されるのではないだろうか。また、グローバル・スタディーズ学科は、リテラシーとコンピテ

ンシーの双方が高いほど第一希望の就職先から内定を得ている傾向があった。これは、グローバル・スタディーズ学科の学生が目指す企業の中には、外国語能力、快活さなどリテラシーとコンピテンシーの両方の能力が求められることが多いと推察される。一方で、健康栄養学科はリテラシーとコンピテンシーが高いほど第一希望以外の就職先から内定を得ている傾向があった。この結果については明確な考察が困難であるため、本稿での言及は行わないこととする。

今回の分析では、GPA スコア、PROG テストスコア、就職先のデータが揃っていた学生の人数が極端に少なかった（人間発達学科 48 名、心理福祉学科 11 名、健康栄養学科 11 名、グローバル・スタディーズ学科 5 名）。したがって、先述したように本結果は参考程度に留めておく必要があり、さまざまなデータの安定的な収集について検討する必要があると考えられる。

#### 4. 今後の「就職に関する IR」の課題

以下、2020 年度「就職に関する IR」の問題点を踏まえた上で、今後の課題について述べる。

まず、今後の課題として PROG テストの受検率を上昇させ、内定報告書の提出を促す方策が必要であると考えられる。PROG テストは、ジェネリックスキルを可視化し、客観的評価の指標を設けることで教育成果の検証を行うために活用される。そのため、本学の教育を通じてジェネリックスキルがどのように育成されているのかを知るためには、4 年間の継続的に蓄積されたデータが不可欠となる。しかし、今回用いたデータは 4 年生 225 名中 89 名（39.6%）の受検に留まり、十分なデータが得られなかった。また、第一希望の就職先か否かについては内定報告書の中に項目が設定されているが、内定報告書を提出しない学生や、たとえ提出していたとしても当該項目に対して未回答の学生も多かった。これらの状況を勘案すると、本分析が必ずしも本学の実態を的確に示しているとは言い難い。したがって、今後は、いかにして PROG テストへの受検率を上げ、内定報告書の提出を促すかは重要な課題であると考えられる。そのためには PROG テストの重要性をさまざまな場面で繰り返し周知することが必要であろう。

第二の課題として、OG へのアンケートの定期的な実施と回収率を上げるための方策を検討する必要がある。キャリア・リソース課では、卒業後 3 年が経過した際、卒業生に対してアンケートを実施している。このアンケートの中には、現在の職場に対する満足度に関連する質問項目がある。卒業時に第一希望の就職先から内定を得たとしても、実際に働き始めると理想と現実のリアリティショックを受け、必ずしも満足した状況にあるとは限らない。したがって、今後はこのような指標を用いながら卒業生の卒業後の動向も含めた包括的な出口戦略を立てていく必要があるだろう。ただし、このアンケートに関しても回収率が 2 割弱と低いという問題点がある。そのため、今後は卒業生の大学へのコミットメントを高め、アンケートの回収率を上げるための取り組みが必要であろう。

第三の課題として、企業のランク指数を設定することが必要であると考えられる。学科によって就職先が大きく異なるため一律でランク付けするのは困難であるものの、多角的な指標を設け総合的に評価できるような仕組みを早急に構築していく必要がある。

Table 1. 学科別GPAスコアとRROGスコアの平均値

学科	GPAスコア	PROGテストスコア								
		リテラシー総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	コンピテンシー総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力
全体	2.81	4.60	3.23	3.10	3.49	3.84	3.00	3.20	3.33	3.09
人間発達学科	3.00	4.36	3.06	2.74	3.34	3.85	3.28	3.66	3.70	2.83
心理福祉学科	2.64	4.42	3.16	3.25	3.83	3.58	2.08	2.17	2.58	3.00
健康栄養学科	2.74	5.11	3.50	3.78	3.78	3.83	2.56	2.78	2.72	3.61
グローバル・スタディーズ学科	2.82	5.50	4.17	4.00	3.33	4.33	3.00	2.50	3.33	4.00

※ 「全体」の各項目の有効回答数は、GPAは228名、それ以外の項目は89名。

※ 「人間発達学科」の各項目の有効数は、GPAは59名、それ以外の項目は53名。

※ 「心理福祉学科」の各項目の有効数は、GPAは39名、それ以外の項目は12名。

※ 「健康栄養学科」の各項目の有効数は、GPAは83名、それ以外の項目は18名。

※ 「グローバル・スタディーズ学科」の各項目の有効数は、「GPA」は47名、それ以外の項目は6名。

Table 2. 学科別の就職先情報（未提出・未回答者，その他を含む全データ）

学科	第一希望以外（人）	第一希望（人）	未提出/未記入（人）	その他（未就職）（人）	合計（人）
人間発達学科	8 13.6%	44 74.6%	7 11.9%	0 0.0%	59
心理福祉学科	9 23.1%	21 53.8%	2 5.1%	7 17.9%	39
健康栄養学科	11 13.3%	31 37.3%	38 45.8%	3 3.6%	83
グローバル・スタディーズ学科	10 21.3%	23 48.9%	7 14.9%	7 14.9%	47
合計	38 16.7%	119 52.2%	54 23.7%	17 7.5%	228

Table 3. 学科別の就職先情報（第一希望，第一希望以外のみ）

学科	第一希望以外（人）	第一希望（人）	合計（人）
人間発達学科	8 15.4%	44 84.6%	52
心理福祉学科	9 30.0%	21 70.0%	30
健康栄養学科	11 26.2%	31 73.8%	42
グローバル・スタディーズ学科	10 30.3%	23 69.7%	33
合計	38 24.2%	119 75.8%	157

## はじめに

本調査は、2017 年度から 2021 年度選抜における受験者並びに入学者の在籍高校所在地別人数と傾向を纏めたものである。各地域の受験生動向を、5 年分のデータを地域別に分類することにより、各種ガイダンスや高校訪問、本学会場以外の試験会場選定の参考になれば幸いである。

## 1. 受験者の在籍高校所在地

【表 1】は、人間学部受験者の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

宮城県内の高校に在籍する受験者の割合は、2017 年度 61.0%、2018 年度 60.4%、2019 年度 58.5%、2020 年度 53.0%、2021 年度 53.9%と減少傾向にある。また、北海道+東北 6 県以外の高校に在籍する受験者の割合も 2021 年度が 1.6%と過去 5 年で最も低い数値となった。

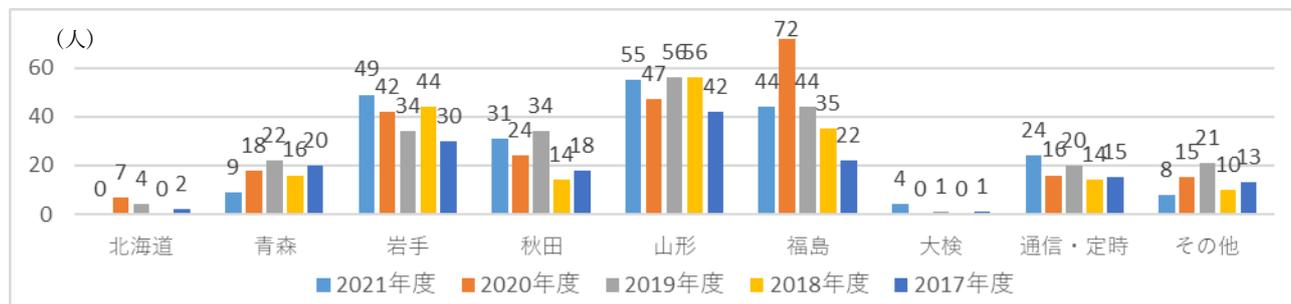
2021 年度選抜で、受験者が過去 5 年の平均値と同等、若しくは平均値以上の数値であった都道府県は、岩手 10.1%、秋田 6.4%、山形 11.3%の 3 県であり、通信制や定時制高校、大学入学資格検定の受験者割合も増加傾向にある。

【表 1】人間学部 受験者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	262	53.9%	0	0.0%	9	1.9%	49	10.1%	31	6.4%	55	11.3%	44	9.1%	4	0.8%	24	4.9%	8	1.6%	486
2020年度	272	53.0%	7	1.4%	18	3.5%	42	8.2%	24	4.7%	47	9.2%	72	14.0%	0	0.0%	16	3.1%	15	2.9%	513
2019年度	332	58.5%	4	0.7%	22	3.9%	34	6.0%	34	6.0%	56	9.9%	44	7.7%	1	0.2%	20	3.5%	21	3.7%	568
2018年度	288	60.4%	0	0.0%	16	3.4%	44	9.2%	14	2.9%	56	11.7%	35	7.3%	0	0.0%	14	2.9%	10	2.1%	477
2017年度	255	61.0%	2	0.5%	20	4.8%	30	7.2%	18	4.3%	42	10.0%	22	5.3%	1	0.2%	15	3.6%	13	3.1%	418
平均	281.8	57.4%	2.6	0.5%	17.0	3.5%	39.8	8.1%	24.2	4.9%	51.2	10.4%	43.4	8.7%	1.2	0.2%	17.8	3.6%	13.4	2.7%	492.4

【図 1】は、宮城県を除く人間学部受験者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

岩手、秋田、山形、福島の受験者数に比べ、北海道、青森の受験者数が著しく低い。一方、通信制や定時制高校は受験者数が伸びつつある。



【図 1】人間学部 在籍高校所在地別受験者数

## 1-1 人間発達学科

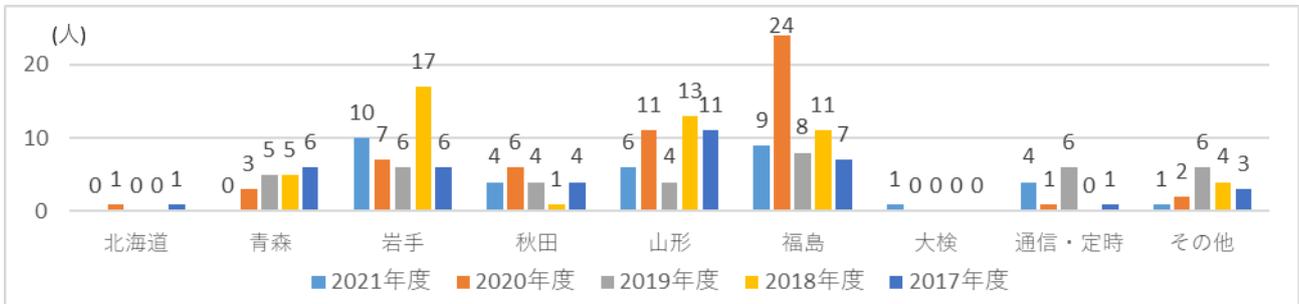
【表 2】は、人間発達学科受験者の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

宮城の在籍高校からの受験者割合は、2021 年度は平均値に近い数値であったが、2020 年度から 2 年連続で 40 人台まで受験者が減少している。また、青森の在籍高校からの受験者も年々減少しており、2021 年度は受験者が不在であった。

【表 2】人間発達学科 受験者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	46	56.8%	0	0.0%	0	0.0%	10	12.3%	4	4.9%	6	7.4%	9	11.1%	1	1.2%	4	4.9%	1	1.2%	81
2020年度	40	42.1%	1	1.1%	3	3.2%	7	7.4%	6	6.3%	11	11.6%	24	25.3%	0	0.0%	1	1.1%	2	2.1%	95
2019年度	79	66.9%	0	0.0%	5	4.2%	6	5.1%	4	3.4%	4	3.4%	8	6.8%	0	0.0%	6	5.1%	6	5.1%	118
2018年度	54	51.4%	0	0.0%	5	4.8%	17	16.2%	1	1.0%	13	12.4%	11	10.5%	0	0.0%	0	0.0%	4	3.8%	105
2017年度	61	61.0%	1	1.0%	6	6.0%	6	6.0%	4	4.0%	11	11.0%	7	7.0%	0	0.0%	1	1.0%	3	3.0%	100
平均	56.0	55.7%	0.4	0.4%	3.8	3.6%	9.2	9.4%	3.8	3.9%	9.0	9.2%	11.8	12.1%	0.2	0.2%	2.4	2.4%	3.2	3.0%	99.8

【図 2】は、宮城県を除く人間発達学科受験者の在籍高校所在地別人数のグラフである。  
2021年度は、北海道、青森からの受験者が不在で、山形、福島からの受験者も減少している。



【図 2】人間発達学科 在籍高校所在地別受験者数

### 1-2 心理福祉学科

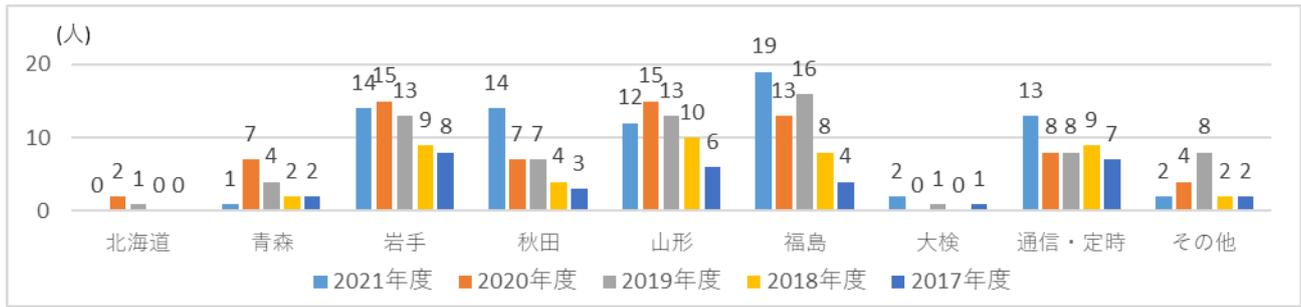
【表 3】は、心理福祉学科受験者の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

宮城の在籍高校からの受験者割合は平均値より若干低い、ここ数年は微増傾向にある。また、2021年度の岩手 9.1%と秋田 9.1%、福島 12.3%が比較的高い傾向にある。

【表 3】心理福祉学科 受験者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	77	50.0%	0	0.0%	1	0.6%	14	9.1%	14	9.1%	12	7.8%	19	12.3%	2	1.3%	13	8.4%	2	1.3%	154
2020年度	67	48.6%	2	1.4%	7	5.1%	15	10.9%	7	5.1%	15	10.9%	13	9.4%	0	0.0%	8	5.8%	4	2.9%	138
2019年度	68	48.9%	1	0.7%	4	2.9%	13	9.4%	7	5.0%	13	9.4%	16	11.5%	1	0.7%	8	5.8%	8	5.8%	139
2018年度	58	56.9%	0	0.0%	2	2.0%	9	8.8%	4	3.9%	10	9.8%	8	7.8%	0	0.0%	9	8.8%	2	2.0%	102
2017年度	51	60.7%	0	0.0%	2	2.4%	8	9.5%	3	3.6%	6	7.1%	4	4.8%	1	1.2%	7	8.3%	2	2.4%	84
平均	64.2	53.0%	0.6	0.4%	3.2	2.6%	11.8	9.5%	7.0	5.3%	11.2	9.0%	12.0	9.2%	0.8	0.6%	9.0	7.4%	3.6	2.9%	123.4

【図 3】は、宮城県を除く心理福祉学科受験者の在籍高校所在地別人数のグラフである。  
2021年度は、青森の受験者が減少している。逆に通信・定時制高校からの受験者が増加している。



【図3】心理福祉学科 在籍高校所在地別受験者数

### 1-3 健康栄養学科

【表4】は、健康栄養学科受験者の在籍高校所在地別人数割合を纏めたものである。

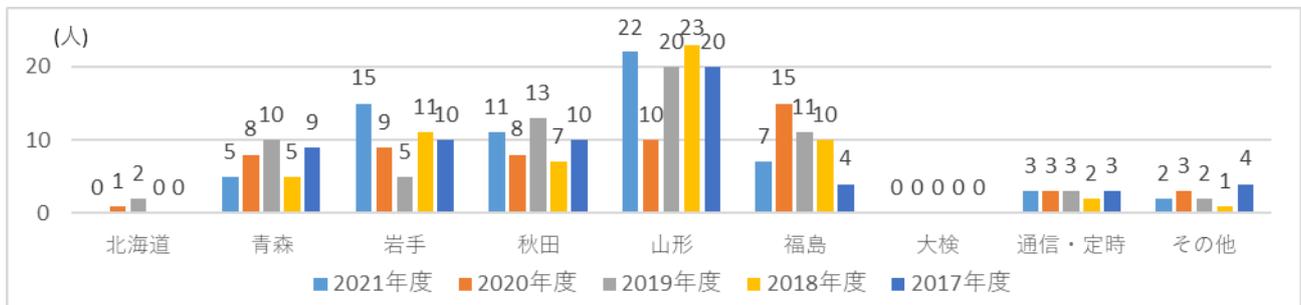
2021年度の宮城在籍高校からの受験者割合は、過去5年の中では最も低い46.7%であり、逆に岩手12.3%と秋田9.0%、山形18.0%が過去5年間の中で最も高い数値であった。

【表4】健康栄養学科 受験者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城	北海道	青森	岩手	秋田	山形	福島	大検	通信・定時	その他	合計
2021年度	57 46.7%	0 0.0%	5 4.1%	15 12.3%	11 9.0%	22 18.0%	7 5.7%	0 0.0%	3 2.5%	2 1.6%	122
2020年度	82 59.0%	1 0.7%	8 5.8%	9 6.5%	8 5.8%	10 7.2%	15 10.8%	0 0.0%	3 2.2%	3 2.2%	139
2019年度	89 57.4%	2 1.3%	10 6.5%	5 3.2%	13 8.4%	20 12.9%	11 7.1%	0 0.0%	3 1.9%	2 1.3%	155
2018年度	95 61.7%	0 0.0%	5 3.2%	11 7.1%	7 4.5%	23 14.9%	10 6.5%	0 0.0%	2 1.3%	1 0.6%	154
2017年度	77 56.2%	0 0.0%	9 6.6%	10 7.3%	10 7.3%	20 14.6%	4 2.9%	0 0.0%	3 2.2%	4 2.9%	137
平均	80.0 56.2%	0.6 0.4%	7.4 5.2%	10.0 7.3%	9.8 7.0%	19.0 13.5%	9.4 6.6%	0.0 0.0%	2.8 2.0%	2.4 1.7%	141.4

【図4】は、宮城県を除く健康栄養学科受験者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

2021年度は、青森と福島の受験者が減少している。



【図4】健康栄養学科 在籍高校所在地別受験者数

### 1-4 グローバル・スタディーズ学科

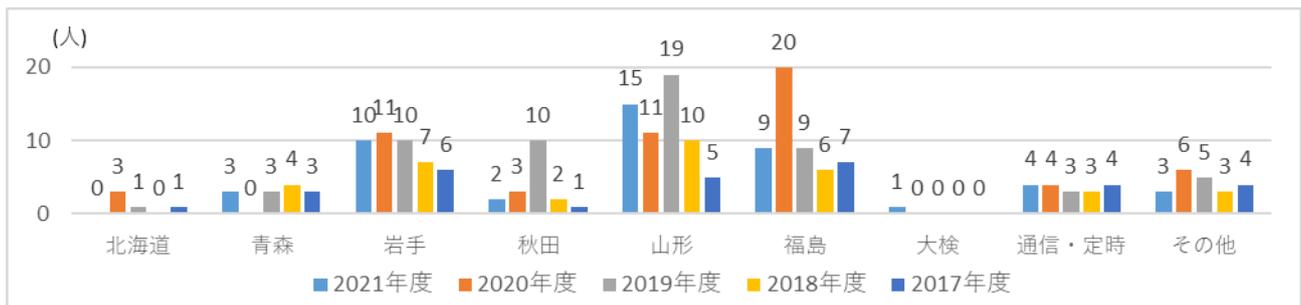
【表5】は、グローバル・スタディーズ学科（以下GS学科）受験者の在籍高校所在地別人数割合を纏めたものである。

宮城の在籍高校からの受験者割合は、毎年ほぼ6割をキープしている。

【表5】GS学科 受験者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	82	63.6%	0	0.0%	3	2.3%	10	7.8%	2	1.6%	15	11.6%	9	7.0%	1	0.8%	4	3.1%	3	2.3%	129
2020年度	83	58.9%	3	2.1%	0	0.0%	11	7.8%	3	2.1%	11	7.8%	20	14.2%	0	0.0%	4	2.8%	6	4.3%	141
2019年度	96	61.5%	1	0.6%	3	1.9%	10	6.4%	10	6.4%	19	12.2%	9	5.8%	0	1.0%	3	1.9%	5	3.2%	156
2018年度	81	69.8%	0	0.0%	4	3.4%	7	6.0%	2	1.7%	10	8.6%	6	5.2%	0	0.0%	3	2.6%	3	2.6%	116
2017年度	66	68.0%	1	1.0%	3	3.1%	6	6.2%	1	1.0%	5	5.2%	7	7.2%	0	0.0%	4	4.1%	4	4.1%	97
平均	81.6	64.4%	1.0	0.8%	2.6	2.2%	8.8	6.8%	3.6	2.6%	12.0	9.1%	10.2	7.9%	0.2	0.4%	3.6	2.9%	4.2	3.3%	127.8

【図5】は、宮城県を除くGS学科受験者の在籍高校所在地別人数のグラフである。2019年度の秋田、2020年度の福島以外、安定した受験者数と見受けられる。



【図5】グローバル・スタディーズ学科 在籍高校所在地別受験者数

## 2. 受験者の選抜別在籍高校所在地

1項では、受験者の在籍高校所在地に数値化した。2項では、受験者の選抜別に在籍高校所在地を纏めた。尚、選抜対象から社会人選抜と3年次編入学選抜を除いている。

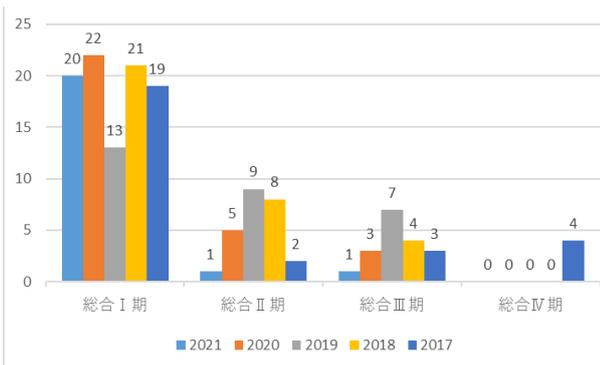
### 2-1 宮城県内高校在籍者の選抜別受験者数

【表6】は、宮城県の高校に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。

2021年度の総合型選抜（Ⅰ期）と学校推薦型選抜（公募）の受験者は平均に近い値だが、総合型選抜（Ⅱ期）及び（Ⅲ期）、一般選抜（A日程）及び大学入学共通テスト利用選抜（A日程）の受験者は減少している。

【表6】人間学部 宮城県内高校在籍者の選抜別人数

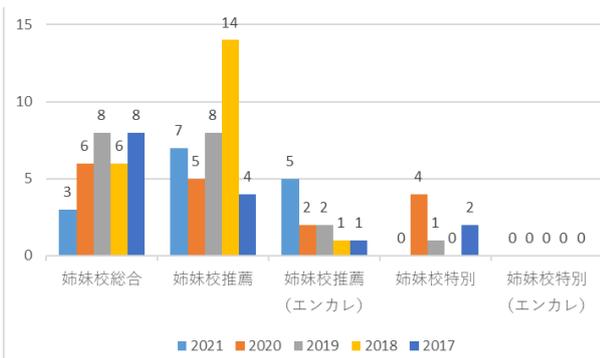
	総合Ⅰ期	総合Ⅱ期	総合Ⅲ期	総合Ⅳ期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
宮城	20	1	1	-	3	7	5	0	0	61	11	63	9	5	59	17	4
2020	22	5	3	-	6	5	2	4	0	50	7	72	11	2	71	10	4
2019	13	9	7	-	8	8	2	1	0	51	10	78	31	4	87	16	8
2018	21	8	4	-	6	14	1	0	0	38	15	71	23	6	74	16	8
2017	19	2	3	4	8	4	1	2	0	33	11	82	20	3	53	9	2
平均	19.0	5.0	3.6	4.0	6.2	7.6	2.2	1.4	0.0	46.6	10.8	73.2	18.8	4.0	68.8	13.6	5.2



【図6】総合型選抜受験者数の推移

【図6】は、総合型選抜を受験した、宮城県の高  
校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグ  
ラフ化したものである。

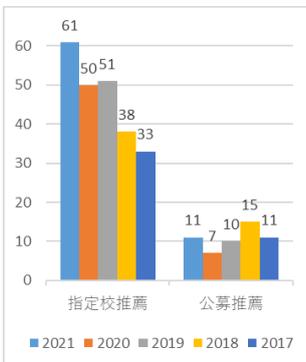
Ⅰ期の受験者数は平均に近い値だが、Ⅱ期とⅢ  
期の受験者が減少傾向にある。



【図7】姉妹校向け選抜受験者数の推移

【図7】は、姉妹校向け各種選抜を受験した、宮  
城県の姉妹高校に在籍している人間学部受験者数  
を年度別にグラフ化したものである。

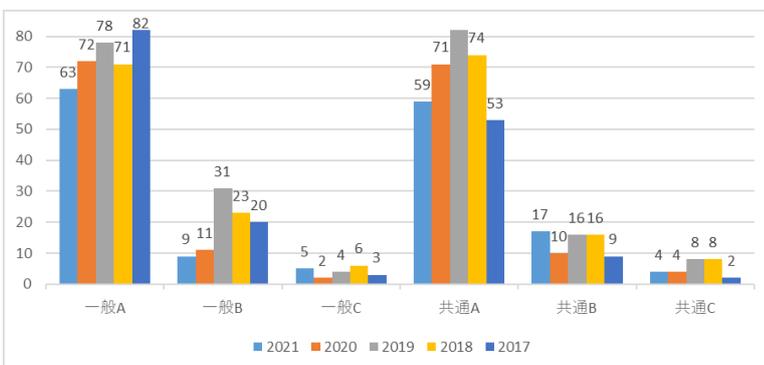
2021年度の総合型選抜（姉妹校）の減少とは対  
照的に、学校推薦型選抜（姉妹校エンカレッジ）  
の受験者が増加している。



【図8】推薦型選抜受験者数の推移

【図8】は、学校推薦型選抜を受験した、宮城県の高  
校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグ  
ラフ化したものである。

学校推薦型選抜（公募）の受験者数は平均値であるが、学校推薦型選抜  
（指定校）の受験者は年々確実に増加している。



【図9】一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

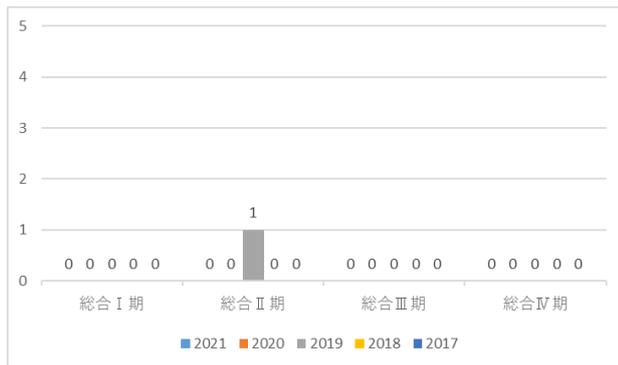
【図9】は、一般・大学入学共通  
テスト利用選抜を受験した、宮城県  
の高校に在籍している人間学部受  
験者数を年度別にグラフ化したも  
のである。

一般選抜（A日程）及び大学入学  
共通テスト利用選抜（A日程）の  
受験者が、年々減少傾向にある。

【表 7】は、北海道の高校に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。全体的に受験者が少ない傾向にある。また、過去 5 年間、学校推薦型選抜（指定校）及び（公募）の受験生は不在である。

【表 7】人間学部 北海道内高校在籍者の選抜別人数

	総合Ⅰ期	総合Ⅱ期	総合Ⅲ期	総合Ⅳ期	姉妹校総合	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別 (エンカレ)	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
北海道	2021	0	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2020	0	0	0	-	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	4	0
	2019	0	1	0	-	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0
	2018	0	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2017	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	平均	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0



【図 10】総合型選抜受験者数の推移

【図 10】は、総合型選抜を受験した、北海道の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

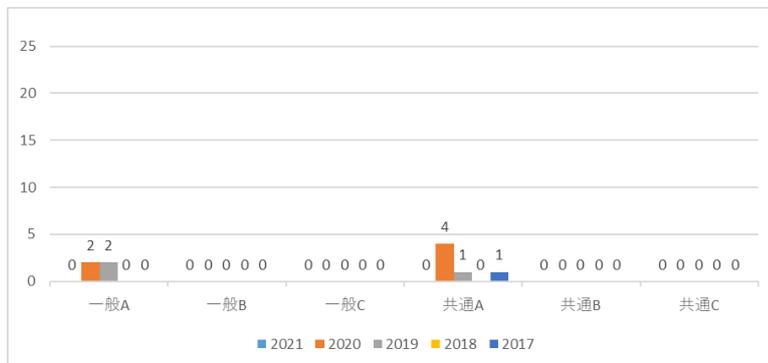
最近では、2019 年度の総合型選抜（Ⅱ期）で 1 名受験したのみである。



【図 11】姉妹校向け選抜受験者数の推移

【図 11】は、姉妹校向け各種選抜を受験した、北海道の姉妹高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

最近では、2017 年度と 2020 年度の学校推薦型選抜（姉妹校）で各 1 名受験したのみである。



【図 12】一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

【図 12】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、北海道の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

ここ最近では、一般選抜（A 日程）と大学入学共通テスト利用選抜（A 日程）を数名が受験したのみで、2021 年度は両選抜共に受験者が不在であった。

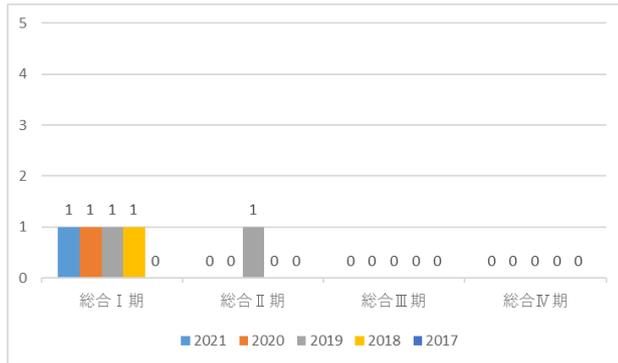
### 2-3 青森県内高校在籍者の選抜別受験者数

【表 8】は、青森県の高校に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。

総合型選抜（Ⅰ期）と学校推薦型選抜（公募）は例年通りの受験者が存在するが、学校推薦型選抜（指定校）の受験者が減少傾向にある。

【表 8】 人間学部 青森県内高校在籍者の選抜別人数

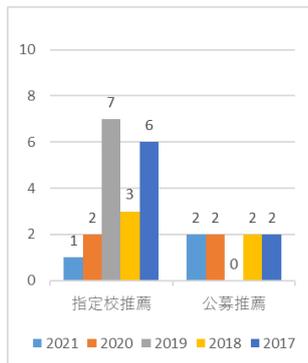
	総合Ⅰ期	総合Ⅱ期	総合Ⅲ期	総合Ⅳ期	姉妹校総合	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
青森	2021	1	0	0	-	-	-	1	2	3	0	0	1	1	0
	2020	1	0	0	-	-	-	2	2	4	2	0	5	1	1
	2019	1	1	0	-	-	-	7	0	3	2	0	6	2	0
	2018	1	0	0	-	-	-	3	2	5	0	0	3	0	2
	2017	0	0	0	0	-	-	6	2	4	0	0	6	1	1
	平均	0.8	0.2	0.0	0.0	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	3.8	1.6	3.8	0.8	0.0	4.2	1.0



【図 13】 総合型選抜受験者数の推移

【図 13】は、総合型選抜を受験した、青森県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

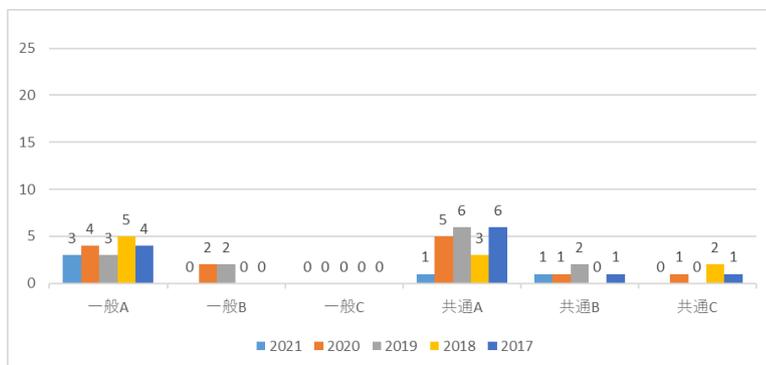
総合型選抜（Ⅰ期）の受験者数は毎年 1 名で推移しているが、（Ⅱ期）以降は受験生不在の年度が多い。



【図 14】 推薦型選抜受験者数の推移

【図 14】は、学校推薦型選抜を受験した、青森県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

総合型選抜の傾向とは対照的に、学校推薦型選抜（公募）は、ほぼ毎年 2 名で推移しているが、学校推薦型選抜（指定校）では受験者が減少傾向にある。



用選抜受験者数の推移

【図 15】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、青森県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

一般選抜（A日程）の受験者は平均に近い値で推移しているが、その他の一般選抜や大学入学共通テスト利用選抜の受験者は減少傾向にある。

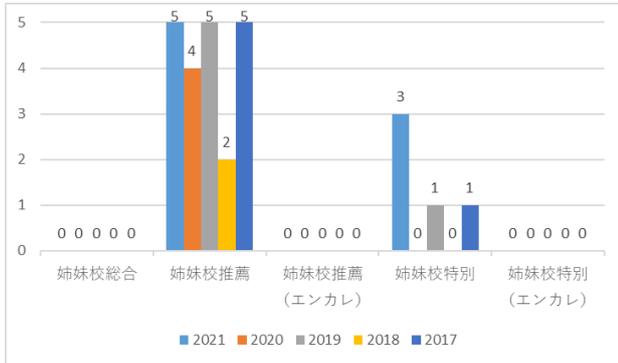
【図 15】 一般・大学入学共通テスト利

## 2-4 岩手県内高校在籍者の選抜別受験者数

【表 9】は、岩手県の高次に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。過去 5 年間、総合型選抜の受験生は不在である。

【表 9】人間学部 岩手県内高校在籍者の選抜別人数

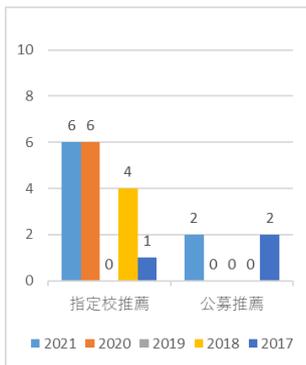
	総合I期	総合II期	総合III期	総合IV期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
岩手	2021	0	0	0	-	0	5	0	3	6	2	13	7	1	10	2	0
	2020	0	0	0	-	0	4	0	0	6	0	9	1	3	15	1	3
	2019	0	0	0	-	0	5	0	1	0	0	8	1	1	12	6	0
	2018	0	0	0	-	0	2	0	0	4	0	15	0	1	0	5	1
	2017	0	0	0	0	0	5	0	1	1	2	7	1	0	8	4	1
	平均	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.2	0.0	1.0	0.0	3.4	0.8	10.4	2.0	1.2	9.0	3.6



【図 16】 姉妹校向け選抜受験者数の推移

【図 16】は、姉妹校向け各種選抜を受験した、岩手県の姉妹高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

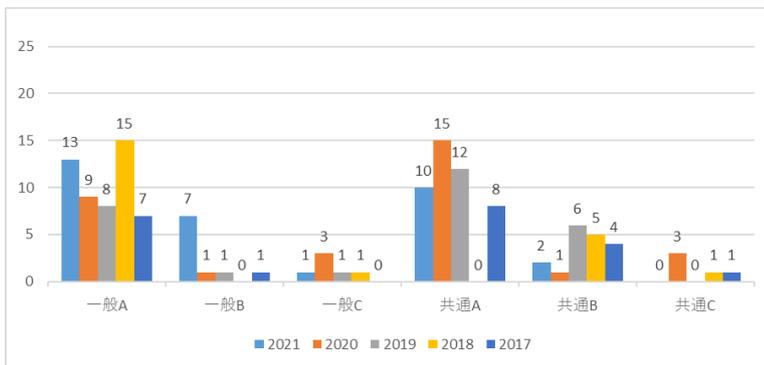
学校推薦型選抜（姉妹校）の受験生は平均に近い値で推移しているが、2021年度は、辞退が可能である学校推薦型選抜（姉妹校特別）の受験者が3名と増加した。



【図 17】 推薦型選抜受験者数の推移

【図 17】は、学校推薦型選抜を受験した、岩手県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

学校推薦型選抜（指定校）の受験者が、2年連続で6名を維持している。また、2021年度は数年ぶりに学校推薦型選抜（公募）の受験者が2名存在した。



用選抜受験者数の推移

【図 18】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、岩手県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

2021年度の一般選抜（A日程）及び（B日程）は増加傾向にあるが、大学入学共通テスト利用選抜は全体的に減少傾向にある。

【図 18】 一般・大学入学共通テスト利

## 2-5 秋田県内高校在籍者の選抜別受験者数

【表 10】は、秋田県の高次に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。全体的に平均値を上回っており、特に一般選抜（A日程）の受験者が大きく増加している。

【表 10】人間学部 秋田県内高校在籍者の選抜別人数

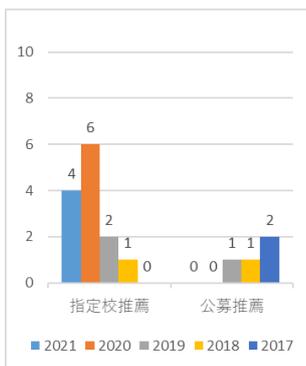
	総合Ⅰ期	総合Ⅱ期	総合Ⅲ期	総合Ⅳ期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
秋田	2021	1	1	0	-	-	-	-	-	4	0	9	2	0	10	4	0
	2020	0	0	0	-	-	-	-	-	6	0	2	2	0	12	2	0
	2019	0	1	0	-	-	-	-	-	2	1	7	2	0	15	3	3
	2018	0	0	0	-	-	-	-	-	1	1	2	0	0	6	3	1
	2017	0	1	0	0	-	-	-	-	0	2	6	0	0	7	2	0
	平均	0.2	0.6	0.0	0.0	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	2.6	0.8	5.2	1.2	0.0	10.0	2.8



【図 19】 総合型選抜受験者数の推移

【図 19】は、総合型選抜を受験した、秋田県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

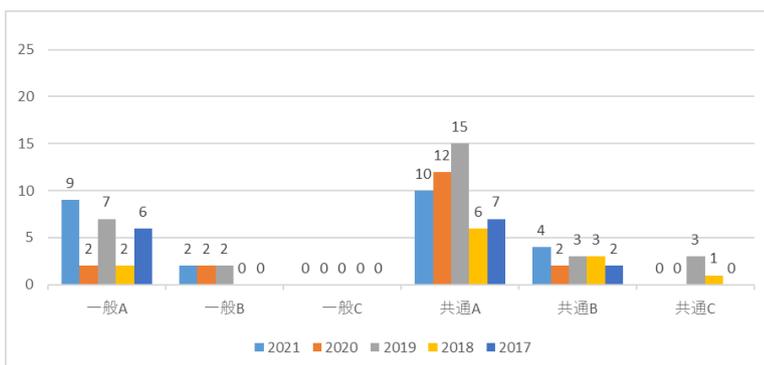
総合型選抜（Ⅱ期）に隔年、受験者が存在したが、2021年度は（Ⅰ期）にも受験者が存在した。



【図 20】 推薦型選抜受験者数の推移

【図 20】は、学校推薦型選抜を受験した、秋田県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

学校推薦型選抜（指定校）は、2021年度受験者が2020年度受験者を下回っているが、平均以上の受験者が存在した。学校推薦型選抜（公募）は、2020年度から2年連続で受験者が不在であった。



用選抜受験者数の推移

【図 21】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、秋田県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

一般選抜（A日程）は、隔年で受験者が増加しているのに対し、大学入学共通テスト利用選抜（A日程）は、年々受験者が減少傾向にある。

【図 21】 一般・大学入学共通テスト利

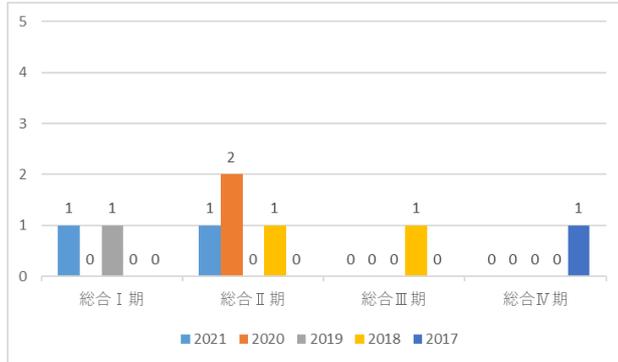
## 2-6 山形県内高校在籍者の選抜別受験者数

【表 11】は、山形県の高次に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。

2021年度は、学校推薦型選抜（指定校）、一般選抜（A日程）、大学入学共通テスト利用（A日程）が2020年度受験者数を上回っている。

【表 11】 人間学部 山形県内高校在籍者の選抜別人数

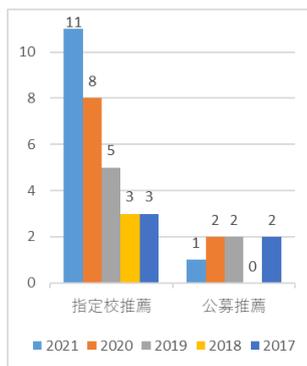
	総合Ⅰ期	総合Ⅱ期	総合Ⅲ期	総合Ⅳ期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
山形	2021	1	1	0	-	-	-	-	-	11	1	20	2	0	18	1	0
	2020	0	2	0	-	-	-	-	-	8	2	10	4	0	14	5	2
	2019	1	0	0	-	-	-	-	-	5	2	14	1	2	27	2	2
	2018	0	1	1	-	-	-	-	-	3	0	21	0	1	22	3	4
	2017	0	0	0	1	-	-	-	-	3	2	20	1	0	11	4	0
	平均	0.4	0.8	0.2	1.0	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	6.0	1.4	17.0	1.6	0.6	18.4	3.0



【図 22】 総合型選抜受験者数の推移

【図 22】は、総合型選抜を受験した、山形県の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

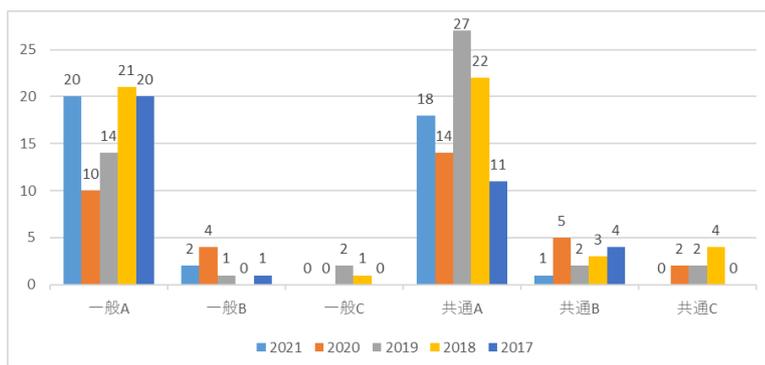
隔年で、受験者が 1 名存在するか否かという傾向が続いている。



【図 23】 推薦型選抜受験者数の推移

【図 23】は、学校推薦型選抜を受験した、山形県の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

学校推薦型選抜（指定校）が年々増加傾向にある。



【図 24】 一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

【図 24】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、山形県の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

2021 年度は、一般選抜（A 日程）の受験者が平均以上の値、大学入学共通テスト利用（A 日程）の受験者が平均値であった

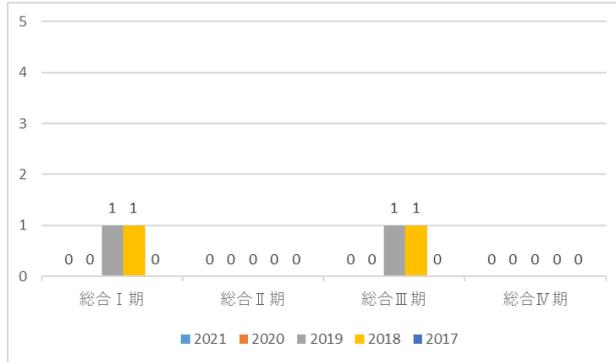
## 2-7 福島県内高校在籍者の選抜別受験者数

【表 12】は、福島県の高校に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。

2021 年度は、学校推薦型選抜（指定校）、一般選抜（A 日程）、大学入学共通テスト利用（A 日程）の受験者が、平均以上の値であった。

【表 12】 人間学部 福島県内高校在籍者の選抜別人数

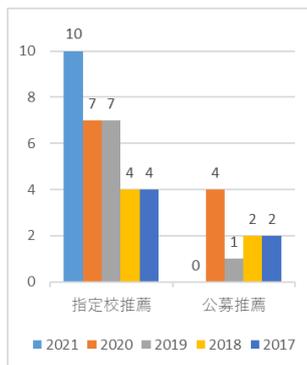
	総合Ⅰ期	総合Ⅱ期	総合Ⅲ期	総合Ⅳ期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
福島	2021	0	0	0	-	-	-	-	-	10	0	13	0	0	21	0	0
	2020	0	0	0	-	-	-	-	-	7	4	13	4	1	27	12	4
	2019	1	0	1	-	-	-	-	-	7	1	8	6	1	12	6	1
	2018	1	0	1	-	-	-	-	-	4	2	8	3	0	13	3	0
	2017	0	0	0	0	-	-	-	-	4	2	5	1	0	7	2	1
	平均	0.4	0.0	0.4	0.0	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	6.4	1.8	9.4	2.8	0.4	16.0	4.6



【図 25】 総合型選抜受験者数の推移

【図 25】は、総合型選抜を受験した、福島県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

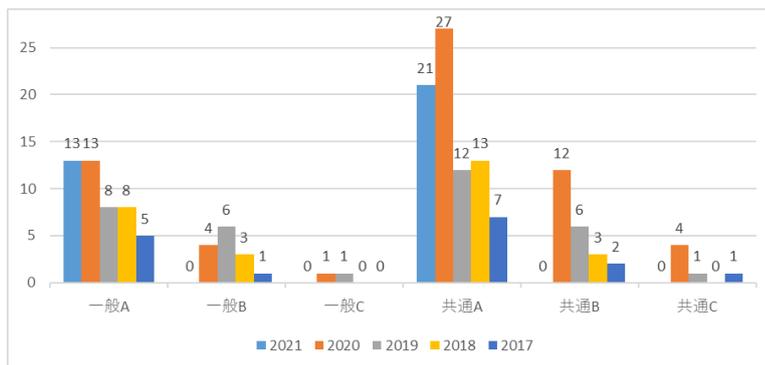
2020 年度から、受験生不在の状態である。



【図 26】 推薦型選抜受験者数の推移

【図 26】は、学校推薦型選抜を受験した、福島県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

学校推薦型選抜（指定校）は受験者が増加傾向にあるのに対し、2021 年度学校推薦型選抜（公募）は受験者が不在である。



【図 27】 一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

【図 27】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、福島県の高次に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

2021 年度一般選抜（A 日程）及び大学入学共通テスト利用（A 日程）は、受験者が平均値以上となったが、その他の選抜では受験者不在である。

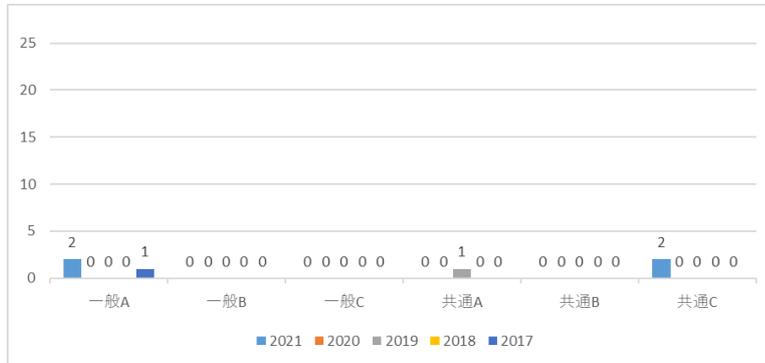
## 2-8 大学入学資格検定者の選抜別受験者数

【表 13】は、大学入学資格検定者の受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。

2021 年度は、一般選抜（A 日程）及び大学入学共通テスト利用（C 日程）に各 2 名の受験者が存在した。尚、総合型選抜での受験者は存在しなかった。

【表 13】 人間学部 大学入学資格検定者の選抜別人数

	総合1期	総合II期	総合III期	総合IV期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
大検	2021	0	0	0	-	-	-	-	-	0	0	2	0	0	0	0	2
	2020	0	0	0	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0
	2019	0	0	0	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	1	0	0
	2018	0	0	0	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0
	2017	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	1	0	0	0	0	0
	平均	0.0	0.0	0.0	0.0	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.2	0.0



【図 28】一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

【図 28】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、大学入学資格検定者の人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

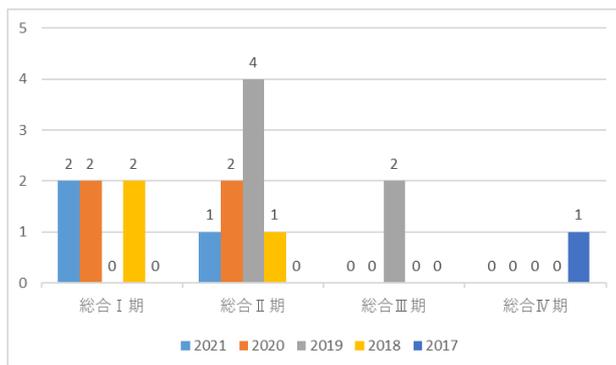
受験者数は少ないながらも、2021年度は、一般選抜（A日程）及び大学入学共通テスト利用（C日程）に各2名の受験者が存在した。

## 2-9 通信・定時制高校在籍者の選抜別受験者数

【表 14】は、通信・定時制高校在籍者の受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。全体的に微増傾向にある。

【表 14】人間学部 通信・定時制高校在籍者の選抜別人数

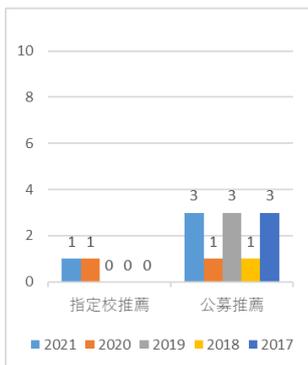
	総合1期	総合II期	総合III期	総合IV期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
通信・定時	2021	2	1	0	-	-	-	-	-	1	3	7	1	1	2	0	1
	2020	2	2	0	-	-	-	-	-	1	1	7	1	0	0	0	0
	2019	0	4	2	-	-	-	-	-	0	3	3	1	0	5	0	0
	2018	2	1	0	-	-	-	-	-	0	1	6	2	0	1	0	0
	2017	0	0	0	1	-	-	-	-	0	3	5	1	1	3	0	0
	平均	1.2	1.6	0.4	1.0	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	0.4	2.2	5.6	1.2	0.4	2.2	0.0



【図 29】総合型選抜受験者数の推移

【図 29】は、総合型選抜を受験した、通信・定時制高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

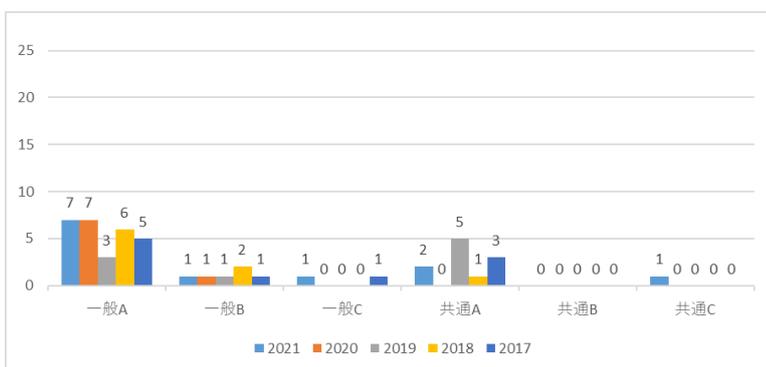
総合型選抜（I期）の受験者が、例年、同数存在している。



【図 30】は、学校推薦型選抜を受験した、通信・定時制高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

学校推薦型選抜（指定校）及び学校推薦型選抜（公募）の受験者が、例年或いは隔年、同数存在している。

【図 30】 推薦型選抜受験者数の推移



【図 31】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、通信・定時制高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

2020 年度に比べ、2021 年度は一般選抜（C 日程）、大学入学共通テスト利用（A 日程）及び（C 日程）の受験者が存在している。

【図 31】 一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

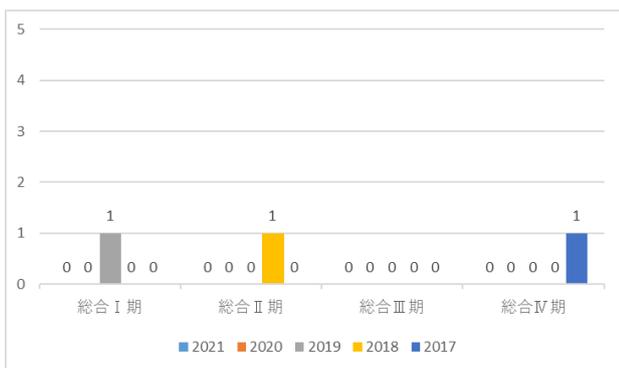
## 2-10 北海道・東北 6 県地域以外の高校在籍者の選抜別受験者数

【表 15】は、北海道・東北 6 県以外の高校に在籍している人間学部受験者を、選抜別に人数を纏めたものである。

2021 年度は、学校推薦型選抜（指定校）に 1 名、一般選抜（B 日程）に 3 名、大学入学共通テスト利用選抜（A 日程）に 4 名の受験者が存在したが、全体的には受験者が低迷している。

【表 15】 人間学部 北海道・東北 6 県地域以外の高校在籍者の選抜別人数

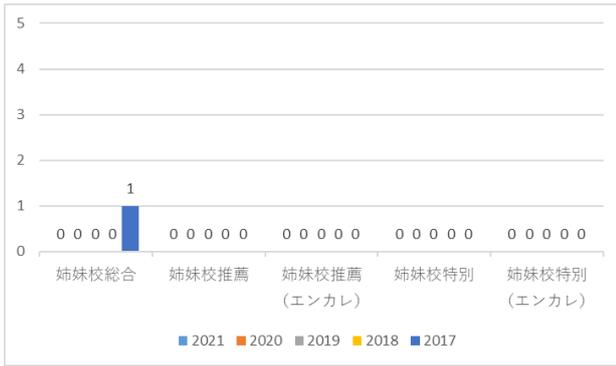
	総合 I 期	総合 II 期	総合 III 期	総合 IV 期	姉妹校総合	姉妹校推薦	姉妹校推薦 (エンカレ)	姉妹校特別	姉妹校特別 (エンカレ)	指定校推薦	公募推薦	一般A	一般B	一般C	共通A	共通B	共通C
2021	0	0	0	-	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	4	0	0
2020	0	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	8	1	3
2019	1	0	0	-	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	11	1	2
2018	0	1	0	-	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	2	2	0
2017	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	3	0	0	7	0	0
平均	0.2	0.2	0.0	1.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	2.4	1.2	0.0	6.4	0.8	1.0



【図 32】は、総合型選抜を受験した、北海道・東北 6 県以外の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

本学を希望する、北海道・東北 6 県以外の高校に在籍している受験者が少数であり、総合型選抜は受験しない傾向にある。

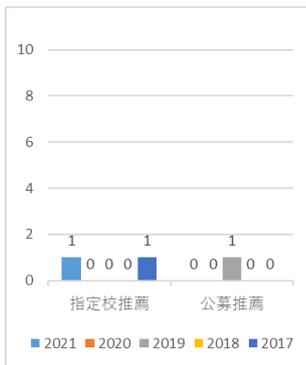
【図 32】 総合型選抜受験者数の推移



【図 33】 姉妹校向け選抜受験者数の推移

【図 33】は、姉妹校向け各種選抜を受験した、北海道・岩手・宮城以外の姉妹高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

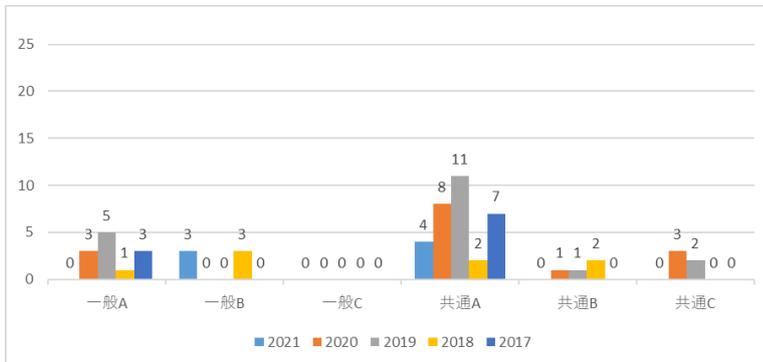
北海道、東北地区以外の姉妹高校に在籍している受験生は、本学を受験しない傾向にある。



【図 34】 推薦型選抜受験者数の推移

【図 34】は、学校推薦型選抜を受験した、北海道・岩手・宮城以外の姉妹高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

学校推薦型選抜（指定校）及び（公募）共に、数年に 1 名程の受験者が存在する。



【図 35】 一般・大学入学共通テスト利用選抜受験者数の推移

【図 35】は、一般・大学入学共通テスト利用選抜を受験した、北海道・東北 6 県以外の高校に在籍している人間学部受験者数を年度別にグラフ化したものである。

一般選抜及び大学入学共通テスト利用選抜共に、受験者が減少傾向にある。

### 3. 入学者の在籍高校所在地

【表 16】は、人間学部入学者の出身高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

宮城県の高校を卒業した入学者の割合は、2017 年度 64.3%、2018 年度 70.2%、2019 年度 62.3%、2020 年度 56.3%、2021 年度 59.0%と 6 割前後で推移している。

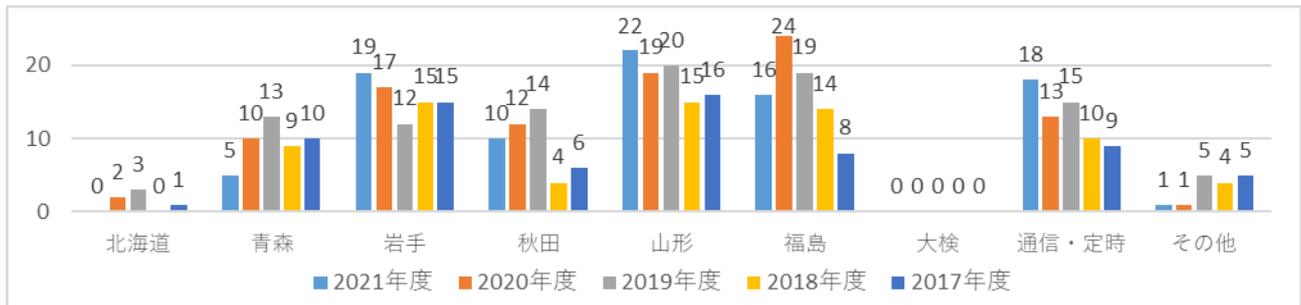
2021 年度選抜で、入学者が過去 5 年の平均値以上の数値であった地域は、岩手 8.6%、山形 9.9% の 2 県であり、秋田、福島の入学者も 2 桁を維持している。また、通信制や定時制高校の出身者の割合も過去 5 年の中で最も高い 8.1%と増加傾向にある。

【表 16】 人間学部 入学者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	131	59.0%	0	0.0%	5	2.3%	19	8.6%	10	4.5%	22	9.9%	16	7.2%	0	0.0%	18	8.1%	1	0.5%	222
2020年度	126	56.3%	2	0.9%	10	4.5%	17	7.6%	12	5.4%	19	8.5%	24	10.7%	0	0.0%	13	5.8%	1	0.4%	224
2019年度	167	62.3%	3	1.1%	13	4.9%	12	4.5%	14	5.2%	20	7.5%	19	7.1%	0	0.0%	15	5.6%	5	1.9%	268
2018年度	167	70.2%	0	0.0%	9	3.8%	15	6.3%	4	1.7%	15	6.3%	14	5.9%	0	0.0%	10	4.2%	4	1.7%	238
2017年度	126	64.3%	1	0.5%	10	5.1%	15	7.7%	6	3.1%	16	8.2%	8	4.1%	0	0.0%	9	4.6%	5	2.6%	196
平均	143.4	62.4%	1.2	0.5%	9.4	4.1%	15.6	6.9%	9.2	4.0%	18.4	8.1%	16.2	7.0%	0	0.0%	13	5.7%	3.2	1.4%	229.6

【図 36】は、宮城県を除く人間学部入学者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

岩手、山形、通信・定時制の受験者が増加傾向にあるが、秋田は減少傾向、福島は 2021 年度のみ対前年比減であった。



【図 36】 人間学部 在籍高校所在地別入学者数

### 3-1 人間発達学科

【表 17】は、人間発達学科の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

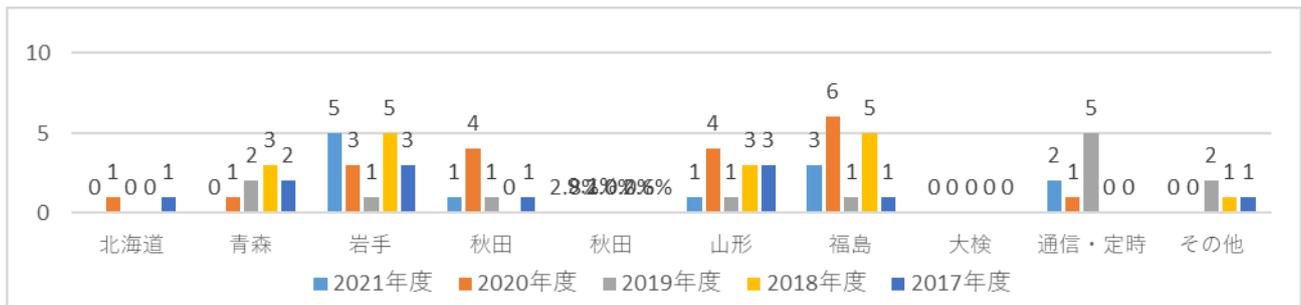
岩手以外の在籍高校からの受験者割合は、減少傾向にある。2021 年度は北海道、青森、北海道+東北 6 県以外の高校に在籍する入学者が不在であった。

【表 17】 人間発達学科 入学者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	24	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	5	13.9%	1	2.8%	1	2.8%	3	8.3%	0	0.0%	2	5.6%	0	0.0%	36
2020年度	24	54.5%	1	2.3%	1	2.3%	3	6.8%	4	9.1%	4	9.1%	6	13.6%	0	0.0%	1	2.3%	0	0.0%	44
2019年度	38	74.5%	0	0.0%	2	3.9%	1	2.0%	1	2.0%	1	2.0%	1	2.0%	0	0.0%	5	9.8%	2	3.9%	51
2018年度	33	66.0%	0	0.0%	3	6.0%	5	10.0%	0	0.0%	3	6.0%	5	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.0%	50
2017年度	26	68.4%	1	2.6%	2	5.3%	3	7.9%	1	2.6%	3	7.9%	1	2.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.6%	38
平均	29.0	66.0%	0.4	1.0%	1.6	3.5%	3.4	8.1%	1.4	3.3%	2.4	5.5%	3.2	7.3%	0.0	0.0%	1.6	3.5%	0.8	1.7%	43.8

【図 37】は、宮城県を除く人間発達学科入学者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

2021 年度は、岩手以外からの入学者は減少している。



【図 37】 人間発達学科 在籍高校所在地別入学者数

### 3-2 心理福祉学科

【表 18】は、心理福祉学科の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

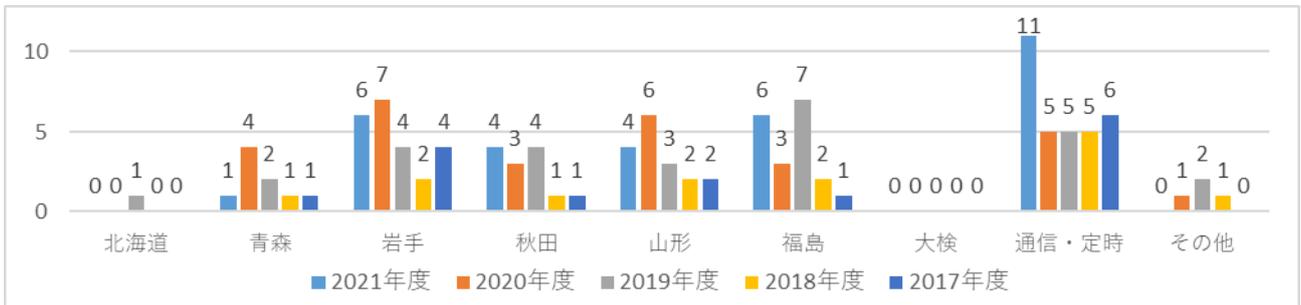
青森の在籍高校からの受験者を除き、ほぼ平均を上回っている。また、年々入学者数が増加傾向にある。2021年度は通信制・定時制高校の入学者も増加した。

【表 18】心理福祉学科 入学者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	28	46.7%	0	0.0%	1	1.7%	6	10.0%	4	6.7%	4	6.7%	6	10.0%	0	0.0%	11	18.3%	0	0.0%	60
2020年度	28	49.1%	0	0.0%	4	7.0%	7	12.3%	3	5.3%	6	10.5%	3	5.3%	0	0.0%	5	8.8%	1	1.8%	57
2019年度	28	50.0%	1	1.8%	2	3.6%	4	7.1%	4	7.1%	3	5.4%	7	12.5%	0	0.0%	5	8.9%	2	3.6%	56
2018年度	27	65.9%	0	0.0%	1	2.4%	2	4.9%	1	2.4%	2	4.9%	2	4.9%	0	0.0%	5	12.2%	1	2.4%	41
2017年度	25	62.5%	0	0.0%	1	2.5%	4	10.0%	1	2.5%	2	5.0%	1	2.5%	0	0.0%	6	15.0%	0	0.0%	40
平均	27.2	54.8%	0.2	0.4%	1.8	3.4%	4.6	8.9%	2.6	4.8%	3.4	6.5%	3.8	7.0%	0	0.0%	6.4	12.6%	0.8	1.6%	50.8

【図 38】は、宮城県を除く心理福祉学科入学者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

2021年度は、通信・定時制の受験者が大幅に増加している。



【図 38】心理福祉学科 在籍高校所在地別入学者数

### 3-3 健康栄養学科

【表 19】は、健康栄養学科の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。

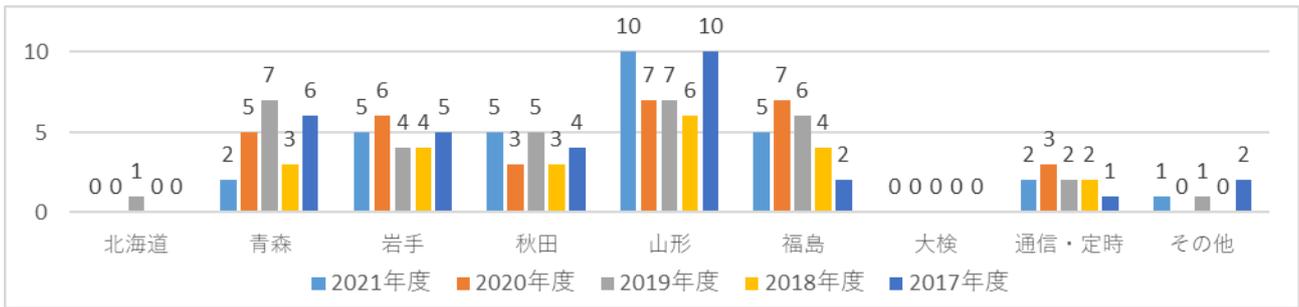
宮城と青森の在籍高校からの受験者が減少傾向にある。

【表 19】健康栄養学科 入学者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	39	56.5%	0	0.0%	2	2.9%	5	7.2%	5	7.2%	10	14.5%	5	7.2%	0	0.0%	2	2.9%	1	1.4%	69
2020年度	39	55.7%	0	0.0%	5	7.1%	6	8.6%	3	4.3%	7	10.0%	7	10.0%	0	0.0%	3	4.3%	0	0.0%	70
2019年度	53	61.6%	1	1.2%	7	8.1%	4	4.7%	5	5.8%	7	8.1%	6	7.0%	0	0.0%	2	2.3%	1	1.2%	86
2018年度	50	69.4%	0	0.0%	3	4.2%	4	5.6%	3	4.2%	6	8.3%	4	5.6%	0	0.0%	2	2.8%	0	0.0%	72
2017年度	34	53.1%	0	0.0%	6	9.4%	5	7.8%	4	6.3%	10	15.6%	2	3.1%	0	0.0%	1	1.6%	2	3.1%	64
平均	43.0	59.3%	0.2	0.2%	4.6	6.3%	4.8	6.8%	4	5.6%	8.0	11.3%	4.8	6.6%	0.0	0.0%	2	2.8%	0.8	1.1%	72.2

【図 39】は、宮城県を除く健康栄養学科入学者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

2021年度は、秋田、山形の受験者が対前年比で増加したが、その他の地域では軒並み減少している。特に青森の受験生が著しく減少している。



【図 39】健康栄養学科 在籍高校所在地別入学者数

### 3-4 GS学科

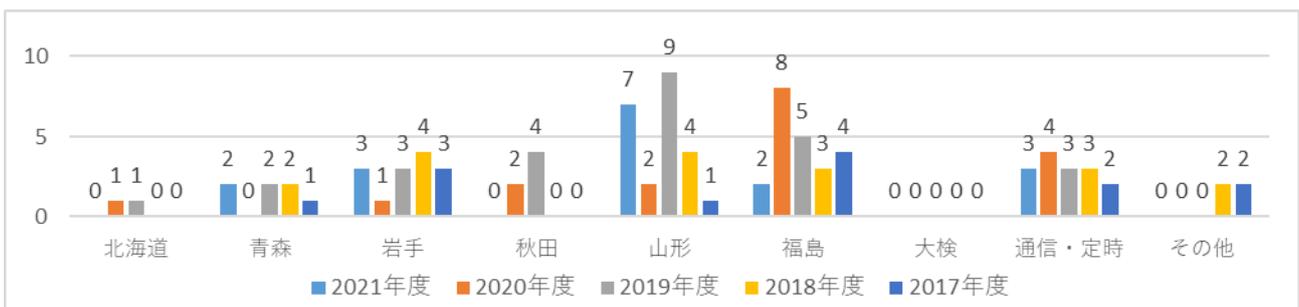
【表 20】は、GS学科の在籍高校所在地別人数と割合を纏めたものである。秋田と福島の在籍高校からの受験者が減少傾向にある。

【表 20】GS学科 入学者の在籍高校所在地別人数と割合

	宮城		北海道		青森		岩手		秋田		山形		福島		大検		通信・定時		その他		合計
2021年度	40	70.2%	0	0.0%	2	3.5%	3	5.3%	0	0.0%	7	12.3%	2	3.5%	0	0.0%	3	5.3%	0	0.0%	57
2020年度	35	66.0%	1	1.9%	0	0.0%	1	1.9%	2	3.8%	2	3.8%	8	15.1%	0	0.0%	4	7.5%	0	0.0%	53
2019年度	48	64.0%	1	1.3%	2	2.7%	3	4.0%	4	5.3%	9	12.0%	5	6.7%	0	1.0%	3	4.0%	0	0.0%	75
2018年度	57	76.0%	0	0.0%	2	2.7%	4	5.3%	0	0.0%	4	5.3%	3	4.0%	0	0.0%	3	4.0%	2	2.7%	75
2017年度	41	75.9%	0	0.0%	1	1.9%	3	5.6%	0	0.0%	1	1.9%	4	7.4%	0	0.0%	2	3.7%	2	3.7%	54
平均	44.2	70.4%	0.4	0.6%	1.4	2.1%	2.8	4.4%	1.2	1.8%	4.6	7.0%	4.4	7.3%	0	0.2%	3	4.9%	0.8	1.3%	62.8

【図 40】は、宮城県を除くGS学科入学者の在籍高校所在地別人数のグラフである。

2021年度は、青森、岩手、山形で対前年比増という結果であった。人間発達学科同様、福島の受験者が大幅減となっている。



【図 40】GS学科 在籍高校所在地別入学者数

### 4. まとめ

2021年度選抜は、生徒、また大学にとっても新型コロナウイルスの影響を受けた入試であったが、本学における受験者の動向として、岩手、秋田、山形の受験者数が増加したことが挙げられる。逆に北海道、青森、福島、その他が減少し、宮城は例年並みであった。予想では、「首都圏を敬遠し受験者数が増加する」と見込んでいたが、本学においては「人の流れ」が大きく変化することはなかった。

本資料には記載していないが、2021年度選抜の受験者傾向として、学校推薦型選抜（指定校・公募）の受験者増が挙げられる。今後は、更に学校推薦型選抜（指定校・公募）と総合型選抜の受験者を増やす努力が必要で、年内に行われる選抜で、ある程度の入学予定者を確保する必要がある。

北海道+東北6県の高校に在籍する受験者（表1）が、本学に入学（表16）する割合を単純計算した結果が右表である。入学率が最も高い地区は青森であり、次いで宮城、岩手、福島、秋田、山形、北海道、その他と続く。今後の営業活動を行うにあたり、受験者数の減少地区に対する戦略や、逆に受験者数の増加地区を更に伸ばす戦略等を検討する上で、選抜別や学科別の入学率算出を行う等、より詳細な分析を行うべきであったと思われる。これらの点を今後の課題としたい。

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	平均	順位
宮城	49.4%	58.0%	50.3%	46.3%	50.0%	50.8%	2
北海道	50.0%	0.0%	75.0%	28.6%	0.0%	30.7%	7
青森	50.0%	56.3%	59.1%	55.6%	55.6%	55.3%	1
岩手	50.0%	34.1%	35.3%	40.5%	38.8%	39.7%	3
秋田	33.3%	28.6%	41.2%	50.0%	32.3%	37.1%	5
山形	38.1%	26.8%	35.7%	40.4%	40.0%	36.2%	6
福島	36.4%	40.0%	43.2%	33.3%	36.4%	37.8%	4
その他	38.5%	40.0%	23.8%	6.7%	12.5%	24.3%	8

## 1. ディプロマ・ポリシーに基づいた学修成果の把握について

目的は、ディプロマ・ポリシー(DP)達成度の可視化である。そのための一つの方法として、PROG テストを活用して、どこまで DP 達成度(人間学部 DP)の可視化ができるかについて、試行的に取り組んでみたことを報告する。また、学生の自己評価によって、どの程度 DP(学科 DP)の達成度が得られているのかについても卒業時アンケートにより調べてみたので報告する。

### (1) PROG テストによる人間学部 DP 達成度の可視化

#### ①PROG テストの評価項目と本学 DP とのマッチングの検討

PROG テストでは、実践的に問題を解決に導く力である「リテラシー」と周囲の環境と良い関係を築く力である「コンピテンシー」を測定できるとなっている。リテラシーには、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力があり、コンピテンシーには、対人基礎力(親和力、協働力、統率力)、対自己基礎力(感情制御力、自信創出力、行動持続力)、対課題基礎力(課題発見力、計画立案力、実践力)、遵法性、創造的思考力などがあり、さらにコンピテンシーには細分化された項目が多数存在する。ここで、本学の人間学部の DP の各項目とリテラシーやコンピテンシーの各項目のマッチングを慎重に調査し、DP のこの部分は、コンピテンシーのこの項目、といったように対応表を作成していった。DP は抽象的な表現であったり、専門的な内容であったりと、すべての DP について PROG テストでの関連性を見出すことは不可能ではあることは予め承知した上での試みと思っていた。きたい。

#### ②DP に対する学生の達成度の可視化

##### ・人間学部の DP と評価に使用する PROG テスト評価項目 (PROG テストでは評価できない DP あり)

「建学の精神に則り、全面的・調和的に**発達した人間性**や幅広い教養と豊かな感性を持ち、**創造力**、**判断力**、**実践力**を有するとともに、人間の真の幸福・平和・福祉に貢献できる女性となることを学位授与の条件とする。」の中の「発達した人間性」→気配り、対人興味・共感・受容、信頼構築、役割理解・連携行動、セルフアウェアネス、ストレスコーピング、遵法性・社会性、「創造力(計画立案)」→目標設定、シナリオ構築、計画評価、リスク分析、自己準拠、流暢性・柔軟性・独創性、新たな価値の創造、「判断力(課題発見力)」→情報収集、本質理解、原因追究、「実践力」→実践行動、修正調整、検証改善で評価。

「人間学部として提供する人間の理解や援助に関する専門的知識と、社会の変化に積極的に対応しえる判断力・**思考力**・実践力を持っていることを学位授与の条件とする。」の「思考力」→情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力で評価。

##### ・測定結果

2020年度の1年生から4年生までの学生について、PROG テストの数値結果を基に学科別、学年別(人間学部)の「**発達した人間性**」「**創造力**」「**判断力**」「**実践力**」「**思考力**」をグラフ化したものが図1～図5である。1年生や2年生などに DP 達成度という表現は適切ではないかも知れないが、ここでは敢えて使わせていただくことにする。もし理想的な数値・グラフの変化というものがあるならば、学年を重ねるごとに、各項目の数値が上がり、各項目の積み重ねとなるグラフの長さが伸びていくということだと思われる。ところが、いずれの学科のグラフを見ても、そのようにきれいに伸びているものは見当たらない。これは 1つの集団(学年)の4年間の成長を追っているわけではなく、1年生から4年生といった異なる集団の個性を見ているに過ぎないので当たり前であると言えるだろう。よって、導入されてまだ2年目という PROG テストでは、現段階では DP 達成度の評価ツールとして適切に使えるのかどうかの評価は困難であると言わざるを得ないが、調査を継続することで分かってくることが多いと思われることから、少なくともあと2年以上は PROG テストを継続していく必要があるだろう。

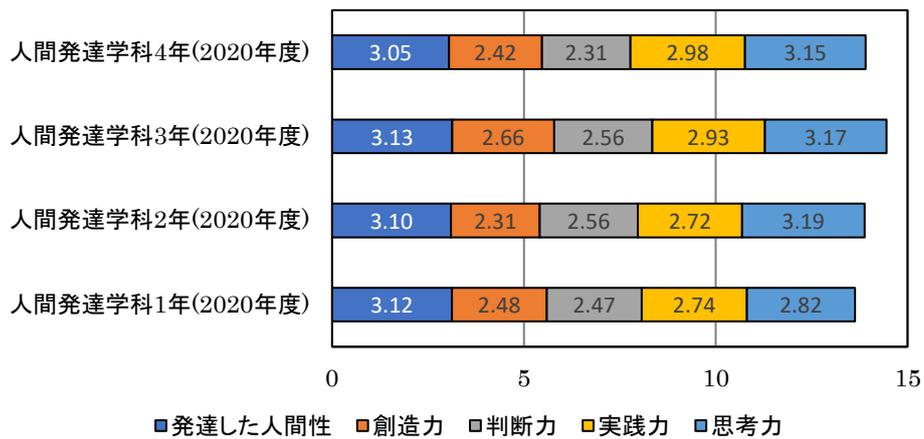


図1 人間発達学科学生のDP達成度評価

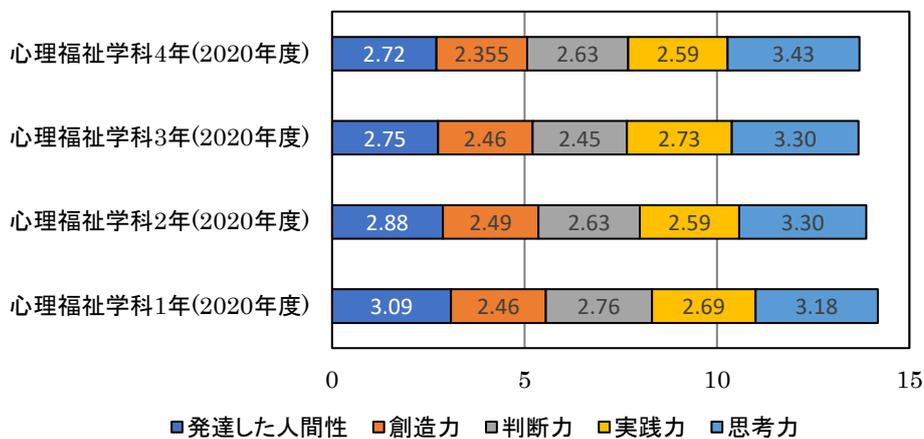


図2 心理福祉学科学生のDP達成度評価

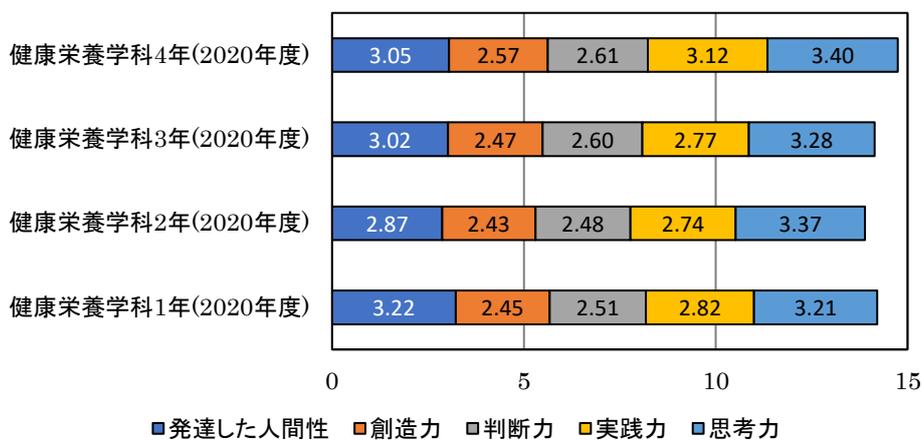


図3 健康栄養学科学生のDP達成度評価

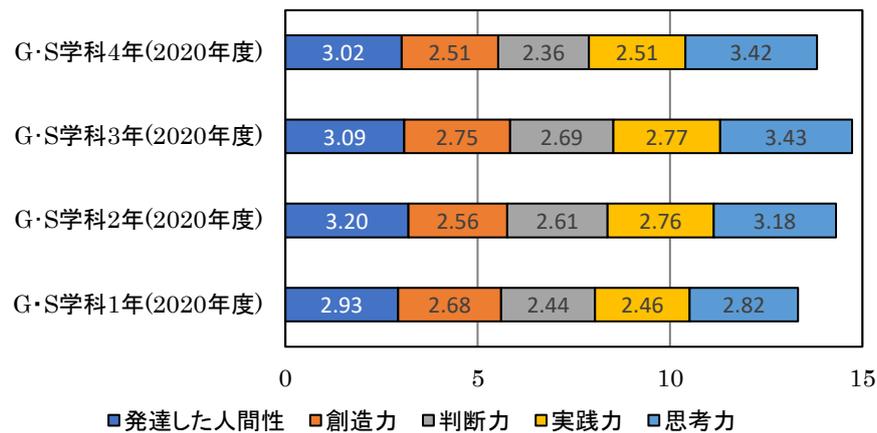


図4 G・S学科学生のDP達成度評価

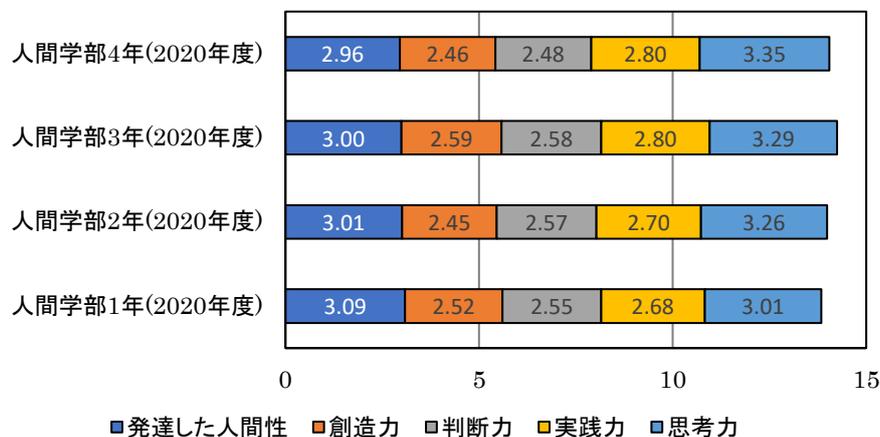


図5 人間学部学生のDP達成度評価

### ③人間学部のDP達成度評価に関連付けられる因子はあるか

②の測定結果のところで、1年生から4年生といった異なる集団の個性という表現を使わせていただいたが、実際にその個性として関連付けられると考えられる4つの因子について、データが全学生の分が揃っていないわけではないので、大雑把な方法とはなってしまうが、関連性があるのかないのか、どの程度なのかについて調べてみることにした。

方法としては、各項目の数値が大体同じくらいの数値となるよう係数をかけて揃え、それをグラフ化した上で、DP達成度の変化と近い動きをする項目は何かを見るという方法である。今回用いたDP達成度の評価指標は5つあったが、ここでは「総合DP達成度」として、この5つの指標の合計値を用いることにした。特に意味があるわけではないが、「総合DP達成度」に掛けた係数は14、同様に「評定」には50、「偏差値」には4、「総合GPA」には60を掛けることで、大体の数値合わせを行った。こうした上で作成したグラフが図6～図10である。図6～図9を見て分かることは、**心理福祉学科と健康栄養学科のGPAが人間発達学科とグローバル・スタディーズ学科のそれと比べた場合に、明らかに低い傾向が見られる**ということである。今後、GPAはDP達成度評価の一指標となる可能性があり、卒業判定時における判定要素に取り入れられる可能性もあると考えられるにも関わらず、学科間のGPAに大きな格差が見られる場合、DP達成度の一評価項目としてよいものなのかどうか、疑問に思われてしまう。よって、今後はGPAをより有効な指標の一つとするためには、成績評価のあり方について検討し、一定の評価指針を作成・提示した上で、基本的にはそれに従うよう成績評価をしていただければならない

のではないかとと思われる。

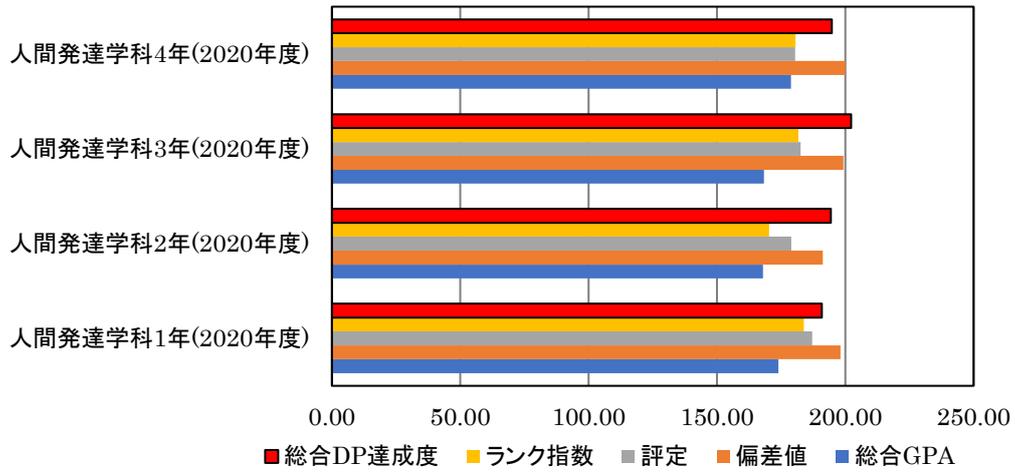


図6 人間発達学科学生の総合DP達成度と4つの因子の関連性

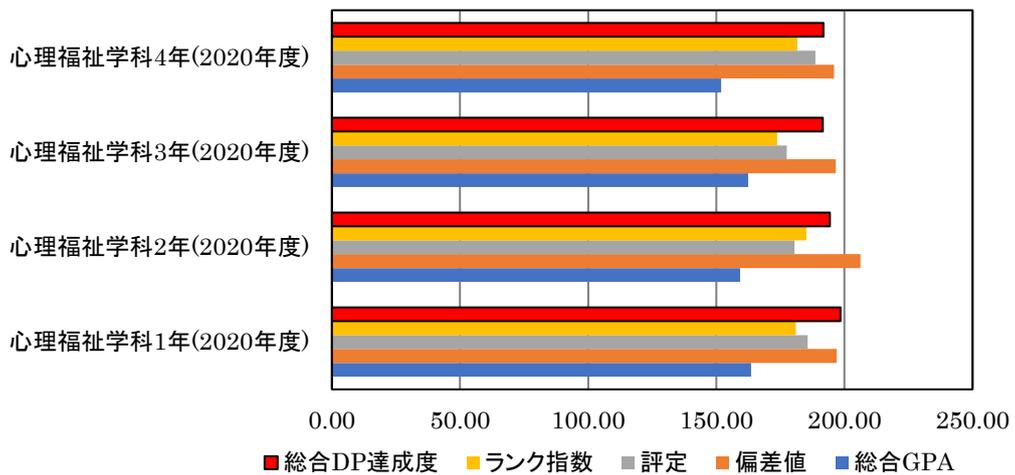


図7 心理福祉学科学生の総合DP達成度と4つの因子の関連性

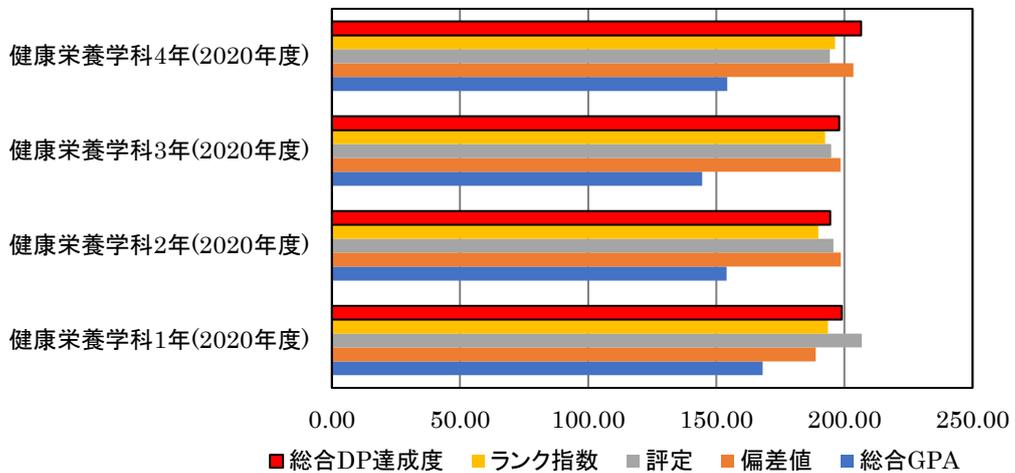


図8 健康栄養学科学生の総合DP達成度と4つの因子の関連性

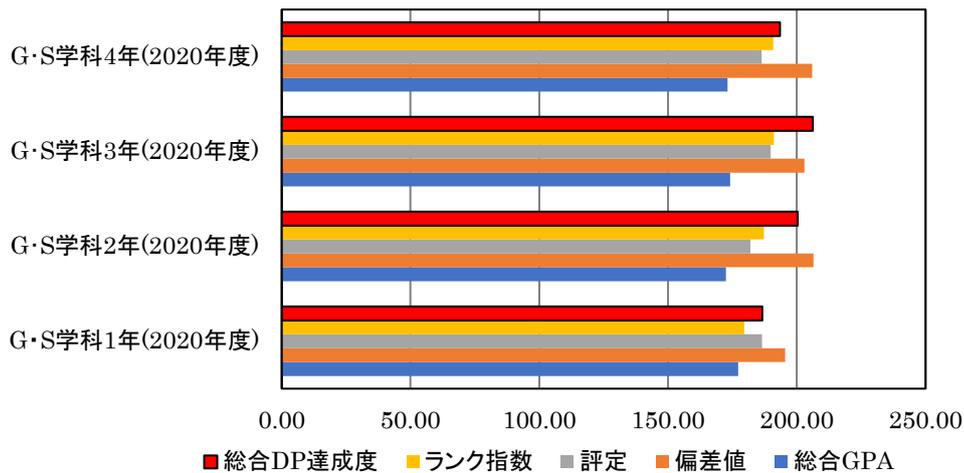


図9 人間発達学科学生の総合DP達成度と4つの因子の関連性

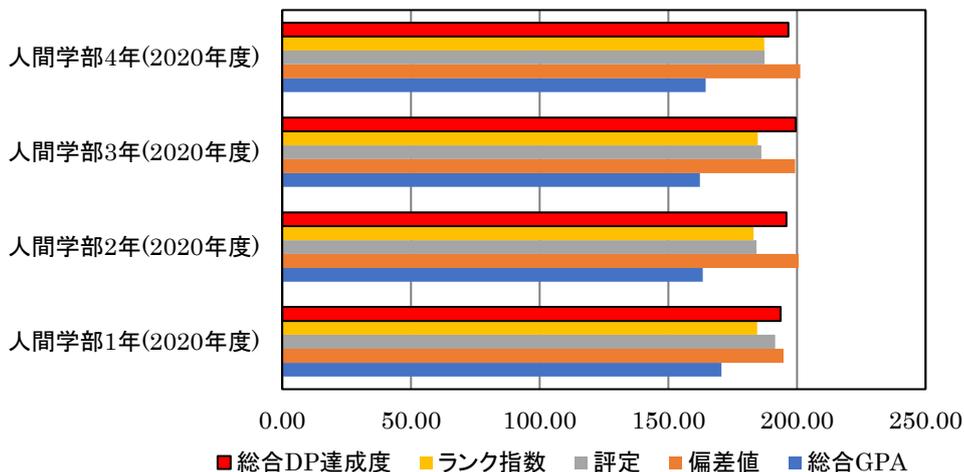


図10 人間発達学科学生の総合DP達成度と4つの因子の関連性

さて、具体的に人間学部の DP への学生の達成度評価に関連付けられる、あるいは影響の大きい因子は何か、ということになるが、理想的な関連因子としては、入学前の成績に関わる出身校の偏差値や高校時の評定平均値、それらの積であるランク指数ではなく、入学してからの学習成果に関連する GPA があげられるべきであると考えられる。図 6～図 9 から、各学科の学年別の DP 達成度の変化と近い変化を示している因子をそれぞれあげてみると、人間発達学科(図 6)では(相関性は低い)、あげるとすれば「偏差値」、心理福祉学科(図 7)では「総合 GPA」、健康栄養学科(図 8)とグローバル・スタディーズ学科(図 9)では「ランク指数」となっている。学部全体(図 10)では、「偏差値」が最も相関性が高い(表 1 参照)。よって、心理福祉学科のみが、DP 達成度と GPA (総合 GPA=GPA 平均) との相関性が高く、入学後の教育によって学生への学習成果をあげているという理想的な形となっていることが示唆される。

結論としては、前述したように、GPA を DP 達成度の一指標として用いるためには、成績評価の指針なるものを示した上で、基本的にはそれにしただった成績の付け方を各教員に実践していただくようにしていくことが必要であるといえるだろう。

表1 各項目間の相関係数

人間発達学科	総合GPA	偏差値	評定	ランク指数	総合DP達成度
総合GPA	1				
偏差値	0.605715771	1			
評定	0.18052136	0.458447073	1		
ランク指数	0.490016535	0.910655668	0.784207348	1	
総合DP達成度	-0.457936845	0.25345819	-0.30716679	0.051833846	1
心理福祉学科	総合GPA	偏差値	評定	ランク指数	総合DP達成度
総合GPA	1				
偏差値	0.076675042	1			
評定	-0.606102985	-0.371983809	1		
ランク指数	-0.361318695	0.652852292	0.45690828	1	
総合DP達成度	0.534248542	0.109752668	0.264734076	0.38926727	1
健康栄養学科	総合GPA	偏差値	評定	ランク指数	総合DP達成度
総合GPA	1				
偏差値	-0.72376231	1			
評定	0.888077808	-0.947331063	1		
ランク指数	0.173963561	0.223183194	0.03973345	1	
総合DP達成度	0.057817497	0.423620077	-0.151840039	0.973104371	1
G・S学科	総合GPA	偏差値	評定	ランク指数	総合DP達成度
総合GPA	1				
偏差値	-0.996121043	1			
評定	0.374729638	-0.338348341	1		
ランク指数	-0.805394107	0.830492266	0.243155357	1	
総合DP達成度	-0.648586555	0.615286789	0.184469218	0.747116649	1
人間学部	総合GPA	偏差値	評定	ランク指数	総合DP達成度
総合GPA	1				
偏差値	-0.865652611	1			
評定	0.921282727	-0.837584185	1		
ランク指数	-0.020000701	0.289617026	0.257298446	1	
総合DP達成度	-0.850238366	0.56890548	-0.601685257	0.176933652	1

## (2) 学生の自己評価による学科 DP 達成度の可視化への試み

学科の DP 達成度を測る方法にも GPA を活用することは有効な手法となるものと考えられるが、今回は学生の立場から、学科の DP に対する達成度についてどう思っているのかを、卒業時アンケートの形で、健康栄養学科の 4 年生に Web 上で実施してみたので、その結果について報告する。

### ①アンケートの質問事項と選択肢等について

質問事項は、健康栄養学科の学科の DP に合わせて、

- 設問 1 疾病の成り立ちに関する専門基礎知識を身に付けることが出来た
- 設問 2 ヒトの健康と栄養に関する専門基礎的知識を身に付けることが出来た
- 設問 3 根拠に基づく健康・栄養課題への支援や対策の実践的方法の基礎を身につけることが出来た
- 設問 4 ヒトとのコミュニケーションや信頼関係を築くためのスキルを身に付けることが出来た
- 設問 5 管理栄養士として社会に貢献するための基礎知識を身に付けることが出来た

設問6 管理栄養士として目指すべき方向性を見出すことが出来た  
という6つの設問に対して、次の選択肢、

- 選択肢1 満足
- 選択肢2 やや満足
- 選択肢3 どちらでもない
- 選択肢4 やや不満足
- 選択肢5 不満足

の中から1つを選んで回答していただいた。

## ②アンケート結果

アンケートの回収率は52/73で71.2%であった。回答一覧は表2のようになり、これをグラフ化すると図11のようになった。「満足」と「やや満足」を足すと、最低でも92.3%以上となることから、学科DPのいずれの項目に対しても、ほぼ満足であったといえるようである。ここでの「満足度」をそのまま「達成度」で置き換えるにはかなり問題があると思われるが、もし仮に「達成度」とした場合には、高い達成度が得られているので良かったと考えられる一方で、「不満足」はゼロではあったが、「どちらでもない」や「やや不満足」を選ぶ回答者がいるという現実は無視できない。今回はDPに関するアンケートとしては初めての実施ということがあり、無記名で行い、かつ、達成度を問うのではなく、満足度を問うものとしたという経緯がある。次年度以降は、学習成果とDP達成度評価には数値的関連性をもたさなければならないと考えられることから、記名式で行うこと、満足度ではなく達成度の自己評価の形の設問で行うこと、この2つのことを考慮して実施していきたい。また達成度と満足度の両方を問うことも考えられる。今回は将来構想委員会での健康栄養学科への課題ということで、実施に当たっては相澤准教授にお骨折りいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

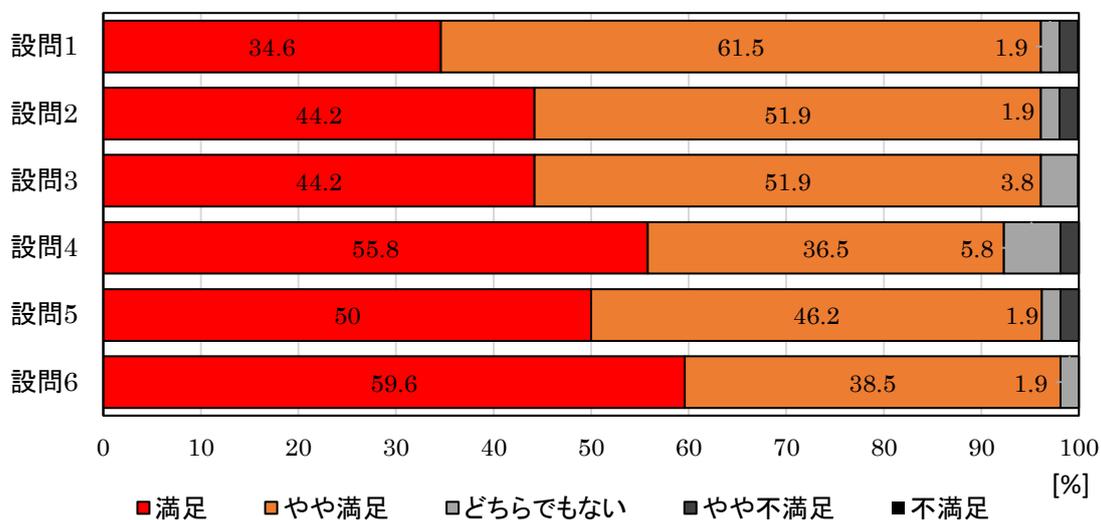


図11 卒業時アンケートによる学科DPの満足度評価

表2 健康栄養学科卒業時アンケート回答一覧

回答者	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
1	2	2	1	1	1	2
2	2	2	2	2	2	2
3	2	2	2	3	2	2
4	2	2	2	2	2	2
5	1	1	1	2	2	1
6	4	4	2	2	2	2
7	2	2	2	2	2	2
8	3	3	3	4	4	3
9	2	2	2	1	1	1
10	2	1	1	1	1	1
11	2	2	2	3	3	2
12	1	1	1	1	1	1
13	2	2	2	2	2	2
14	1	1	1	1	1	1
15	1	1	1	1	2	1
16	1	1	1	1	1	1
17	1	2	2	1	1	1
18	2	2	2	2	2	1
19	2	1	1	2	1	2
20	2	2	2	1	1	1
21	2	2	2	2	2	1
22	2	2	2	2	2	2
23	2	2	2	1	1	1
24	1	1	1	1	1	1
25	2	1	1	2	1	1
26	2	2	2	1	2	2
27	2	2	1	1	1	1
28	1	1	1	1	1	1
29	2	1	1	1	1	1
30	2	2	2	1	2	1
31	2	1	1	1	2	2
32	1	1	1	2	1	2
33	2	2	2	2	2	2
34	1	1	1	1	1	1
35	2	2	2	2	2	2
36	1	1	2	1	1	1
37	2	2	2	2	2	2
38	2	2	2	2	2	1
39	2	2	3	3	2	2
40	1	1	1	1	1	1
41	1	1	2	2	2	1
42	1	1	1	1	1	1
43	1	1	1	1	1	1
44	2	2	2	1	2	1
45	1	1	1	1	1	1
46	2	2	2	2	2	2
47	1	1	1	1	1	1
48	2	1	1	1	1	1
49	2	2	2	1	2	2
50	1	1	1	1	1	1
51	2	2	2	1	1	1
52	2	2	2	2	2	2

## 2. 年度別就職先の変化について

日常における学習成果の把握とその可視化やディプロマ・ポリシー(DP)達成度の可視化などは、大学が取り組む内部質保証体制の実態を PDCA サイクルによってより改善の方向へ導くための手法において重要度が高いことは明らかである。よって、学修成果が上がっていき、かつ、ディプロマ・ポリシー達成度においても向上していくのであれば、それらの総合的な影響は、学生達の就職先にも大きく影響することが予想される。この場合、単に「就職率」ということで捉えるのではなく、「就職先」の内容ということにも目を向けなければならなくなるだろう。そこで、勝手ながら、就職先のカテゴリー化を行った上で、過去4年間の学生の就職先に関するデータを用い、各学科の4年生(卒業生)の就職先カテゴリーの変化を調べてみることにした。今回ここで用いた「就職先カテゴリー」については、今後も引き続き検討されるべき内容を含んでいることは言うまでもない。

### (1) 各学科の卒業生の就職先と各学科の資格等との関連からの就職先のカテゴリー化

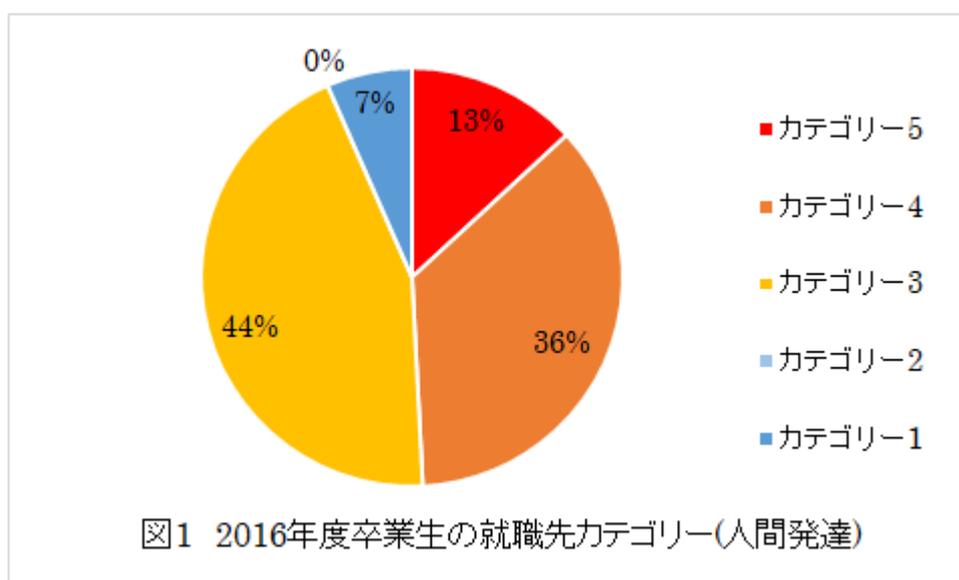
本学のキャリアセンター(現・キャリアリソース課)の年度別・学科別就職先データを基に、業種・職種、資格との関連性(決まった資格がない学科の場合は、学科の特徴との関連性)などから、5つのカテゴリーに分けてみることを考案した(表1)。

表1 今回のカテゴリー化に用いた大雑把な考え方

分類	人間発達学科・心理福祉学科・健康栄養学科	グローバル・スタディーズ学科
カテゴリー5	公務員	公務員
カテゴリー4	資格(難易度高)に関連	学科が重要視する業種(職種)
カテゴリー3	資格(難易度低)に関連	総合職
カテゴリー2	総合職	営業職・事務職
カテゴリー1	一般職・事務職	接客・サービス

この表1に基づき、学科ごとに具体的な職種をあてはめて作成した表(学科別カテゴリー一覧表)があるが、ここではそれを記さないこととする。その表に基づいて、2016年度の卒業生(2017年3月卒)から2019年度の卒業生(2020年3月卒)までの各学科の就職先カテゴリーを図にすると、図1~図16のようになった。

#### ①人間発達学科の場合



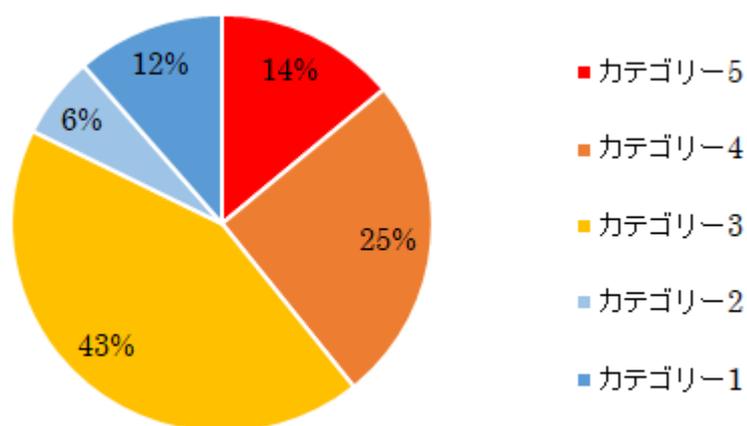


図2 2017年度卒業生の就職先カテゴリー(人間発達)

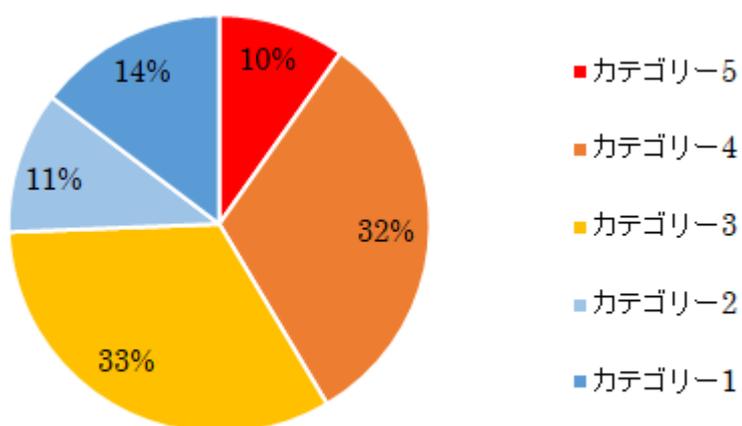


図3 2018年度卒業生の就職先カテゴリー(人間発達)

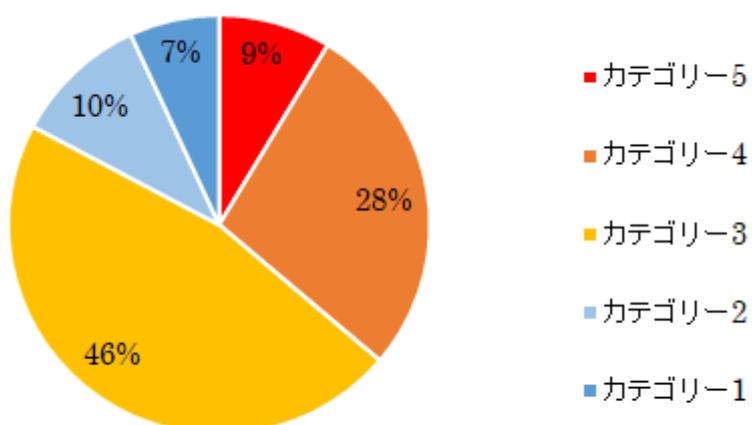
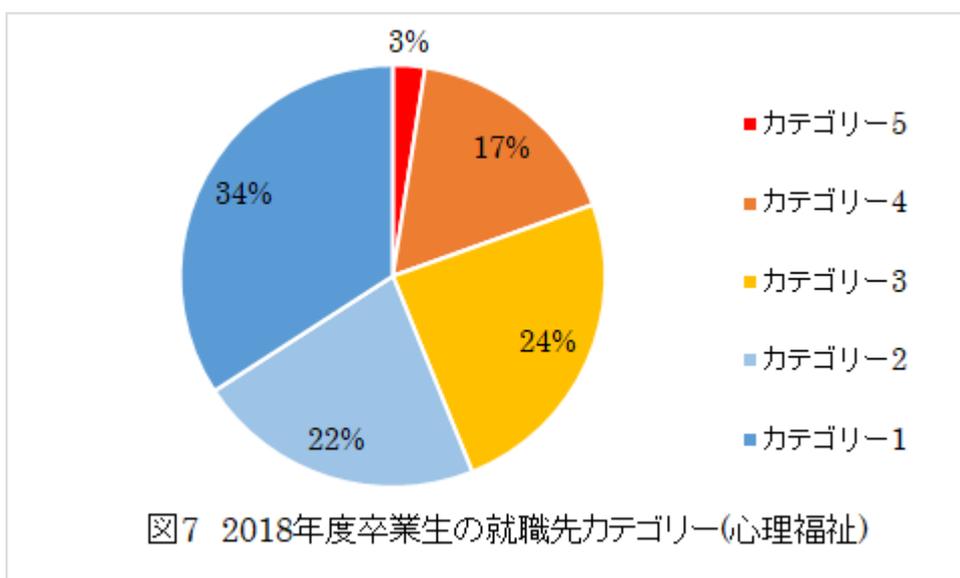
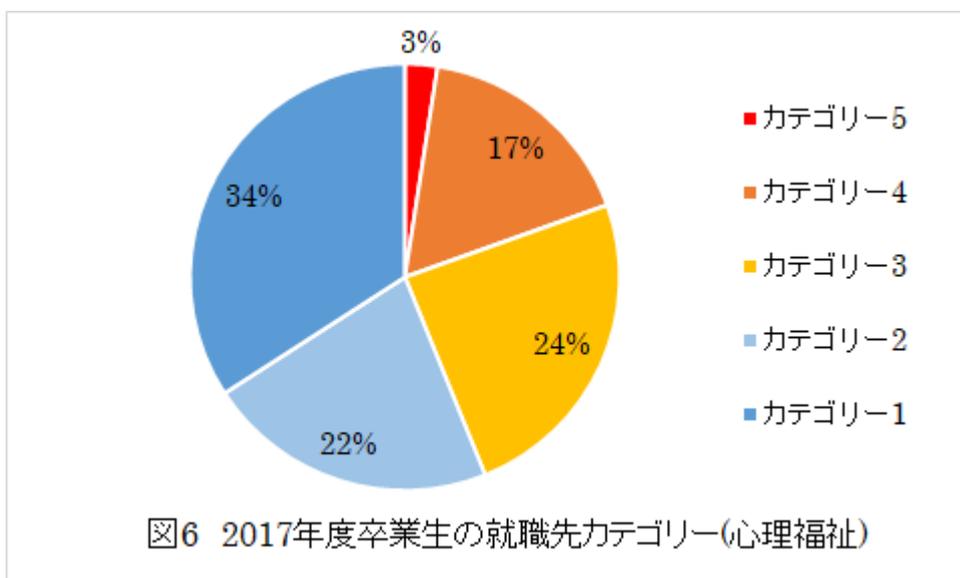
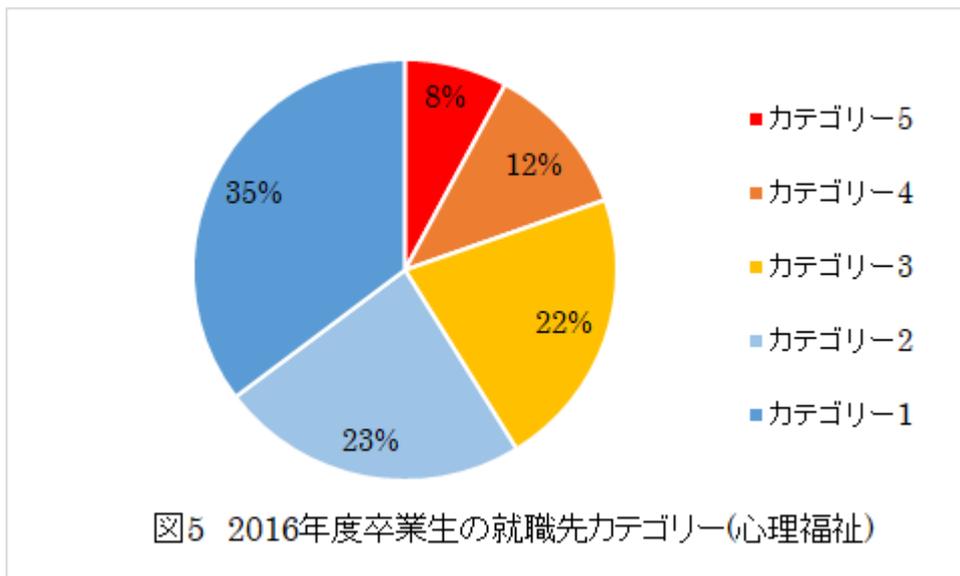
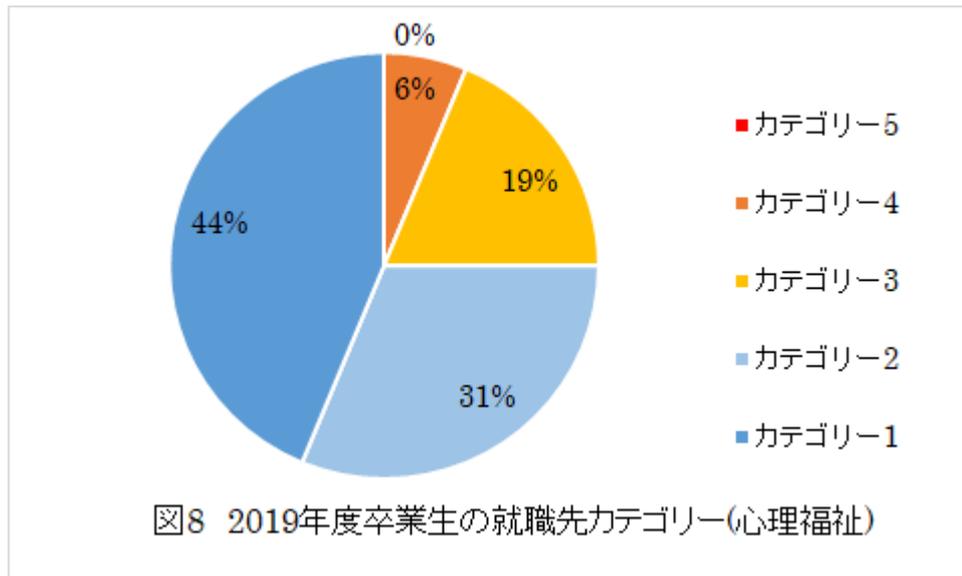


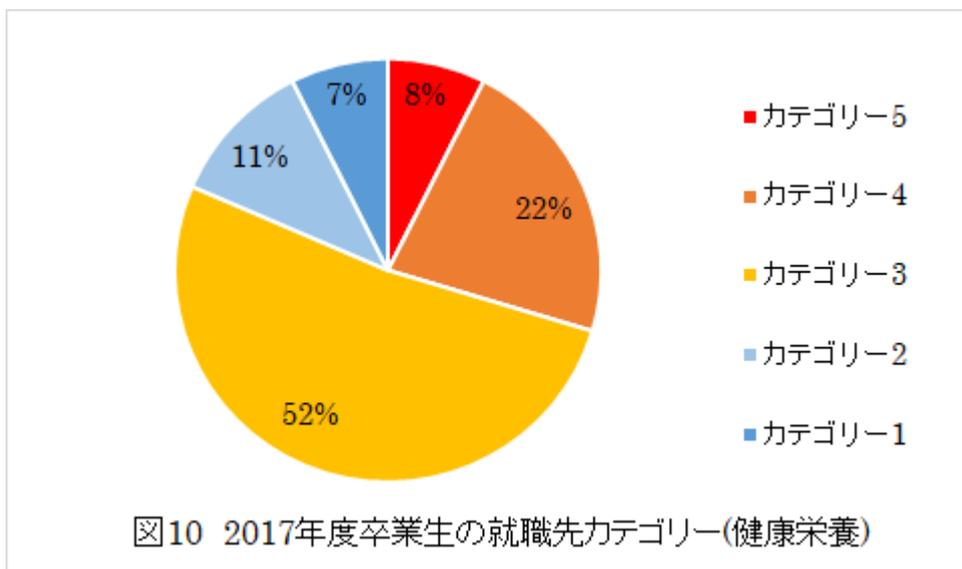
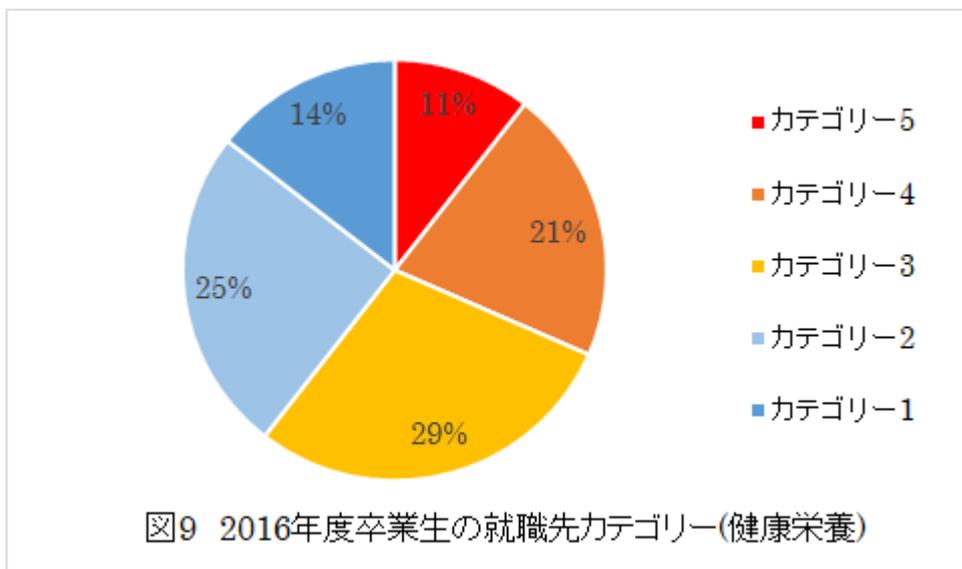
図4 2019年度卒業生の就職先カテゴリー(人間発達)

②心理福祉学科





③健康栄養学科



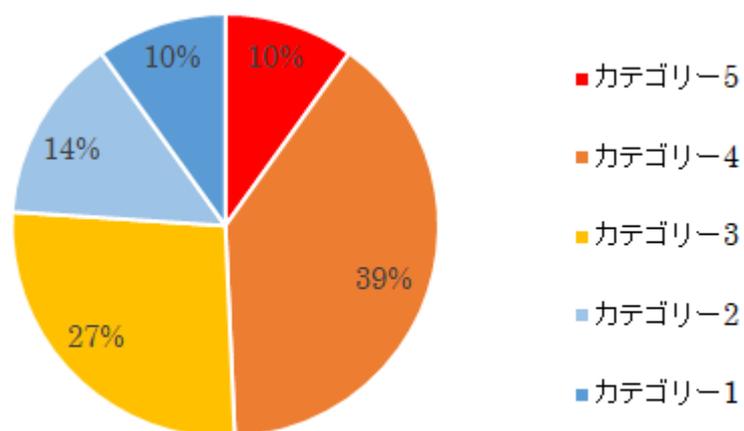


図11 2018年度卒業生の就職先カテゴリー(健康栄養)

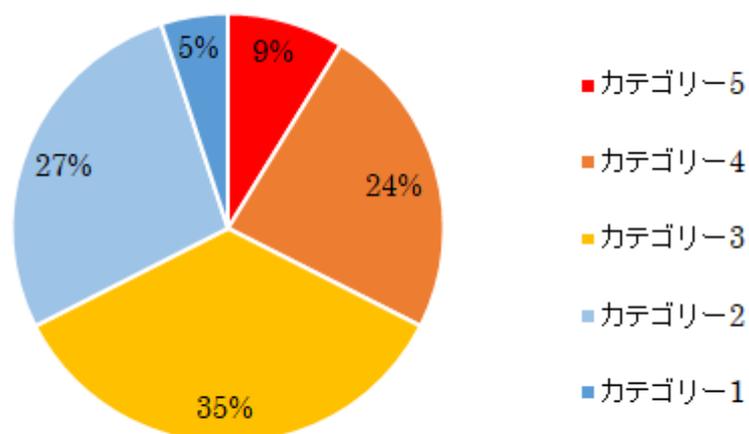


図12 2019年度卒業生の就職先カテゴリー(健康栄養)

#### ④グローバル・スタディーズ学科

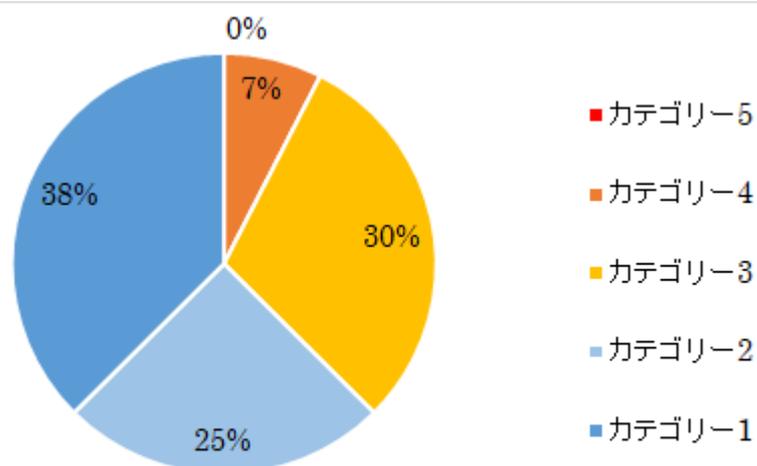


図13 2016年度卒業生の就職先カテゴリー(G・S)

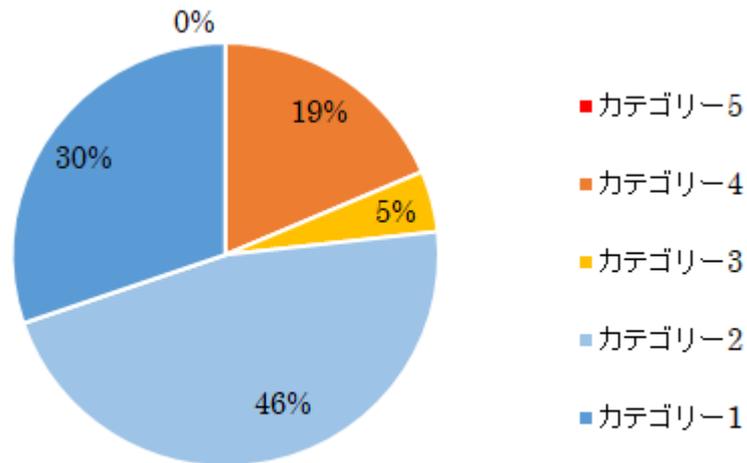


図14 2017年度卒業生の就職先カテゴリー(G・S)

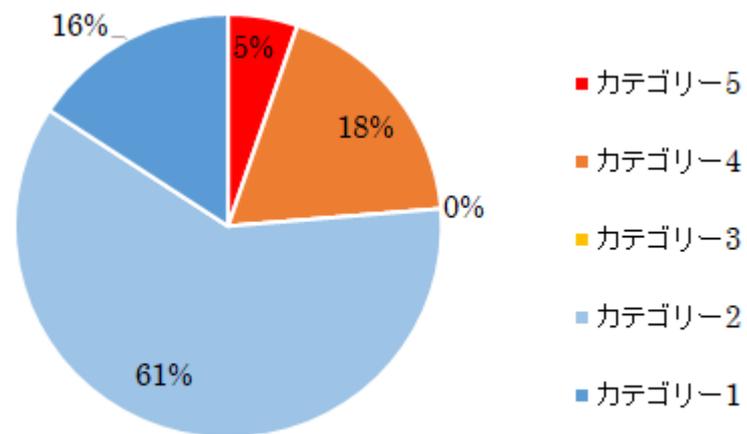


図15 2018年度卒業生の就職先カテゴリー(G・S)

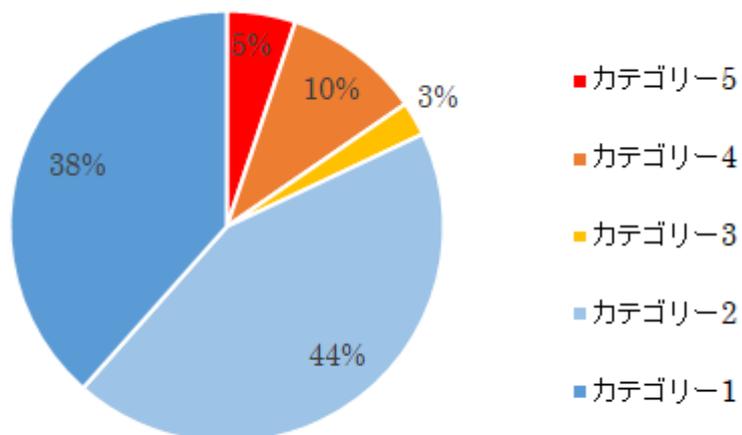
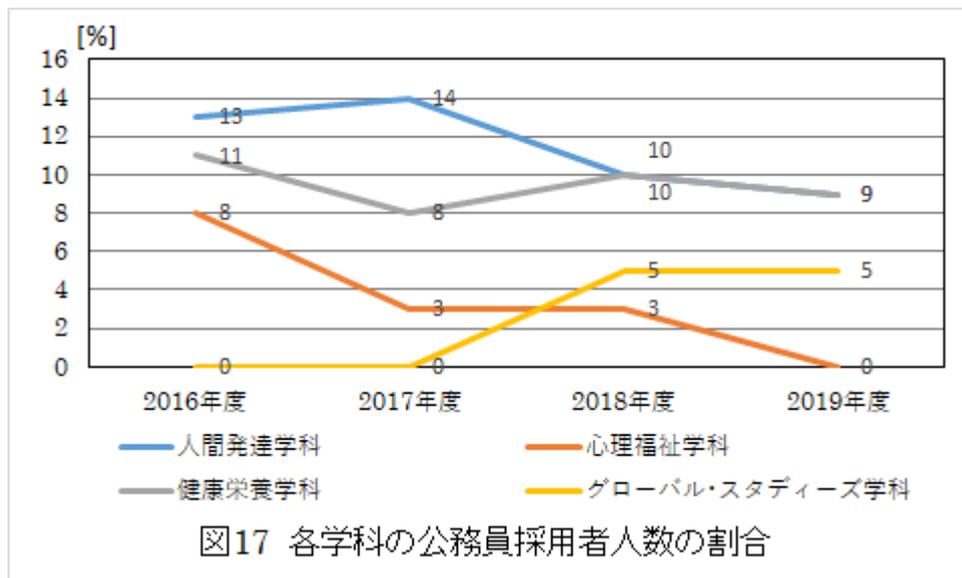


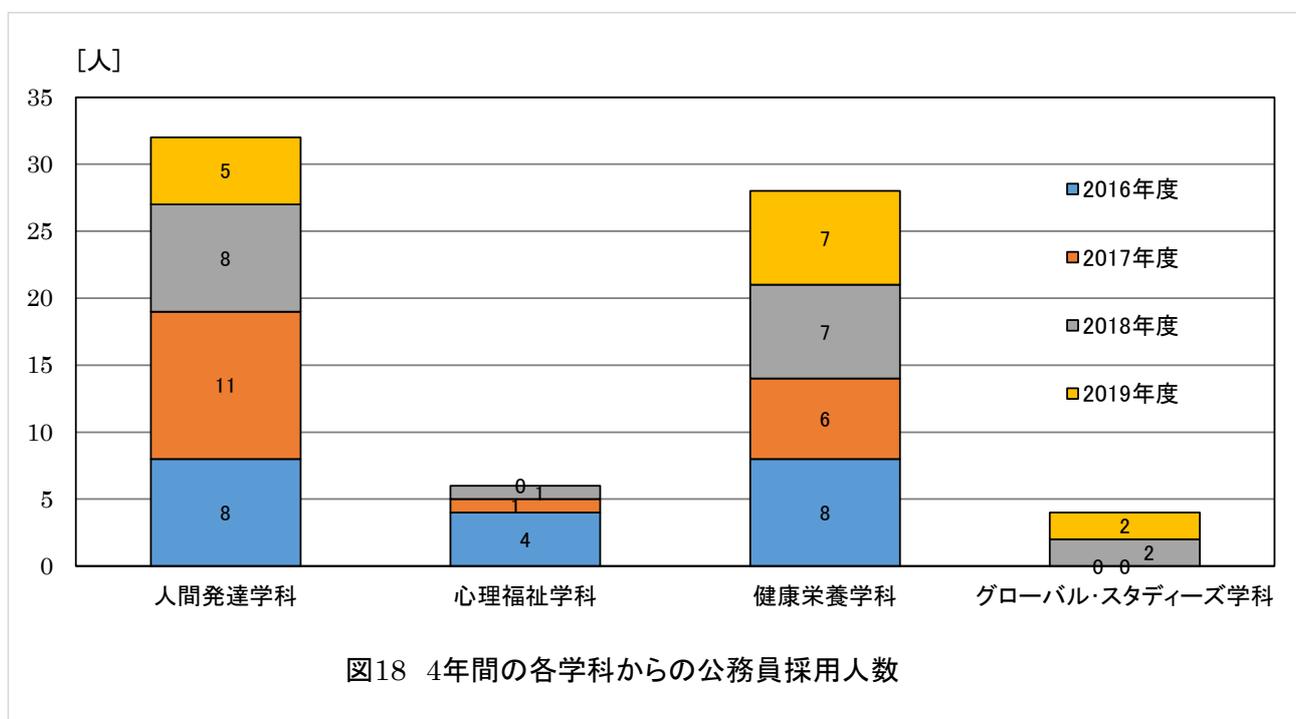
図16 2019年度卒業生の就職先カテゴリー(G・S)

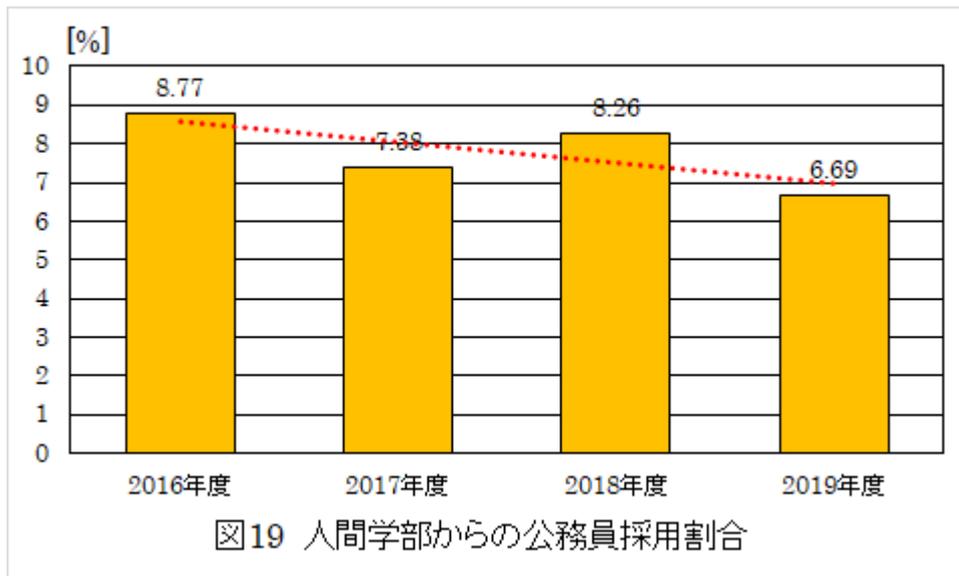
## (2) 特にカテゴリー5（公務員）に注目した場合

(1)での図1～図16を見ると、学科ごと、また同じ学科でも年度ごとに各カテゴリーの割合が変動していることが分かった。これらは、2019年度卒業生までの結果であって、2020年度卒業生からは、コロナ禍の影響があるため、さらに大きな変動が見られるかも知れない。このような世の中の変動が大きい中でも、カテゴリー5の公務員は、大学としてもできるだけ多くの学生に採用をいただきたい就職先である。そこで、各学科の年度別カテゴリー5への就職者割合を図にしてみると、図17のようになり、教員採用=公務員採用となる場合の多い人間発達学科以外ではあまり高くはないことが分かった。



過去4年間の学科別公務員採用人数は、図18のようになる。これらの人数をもとに人間学部としての公務員採用割合を見てみると、図19のようになる。

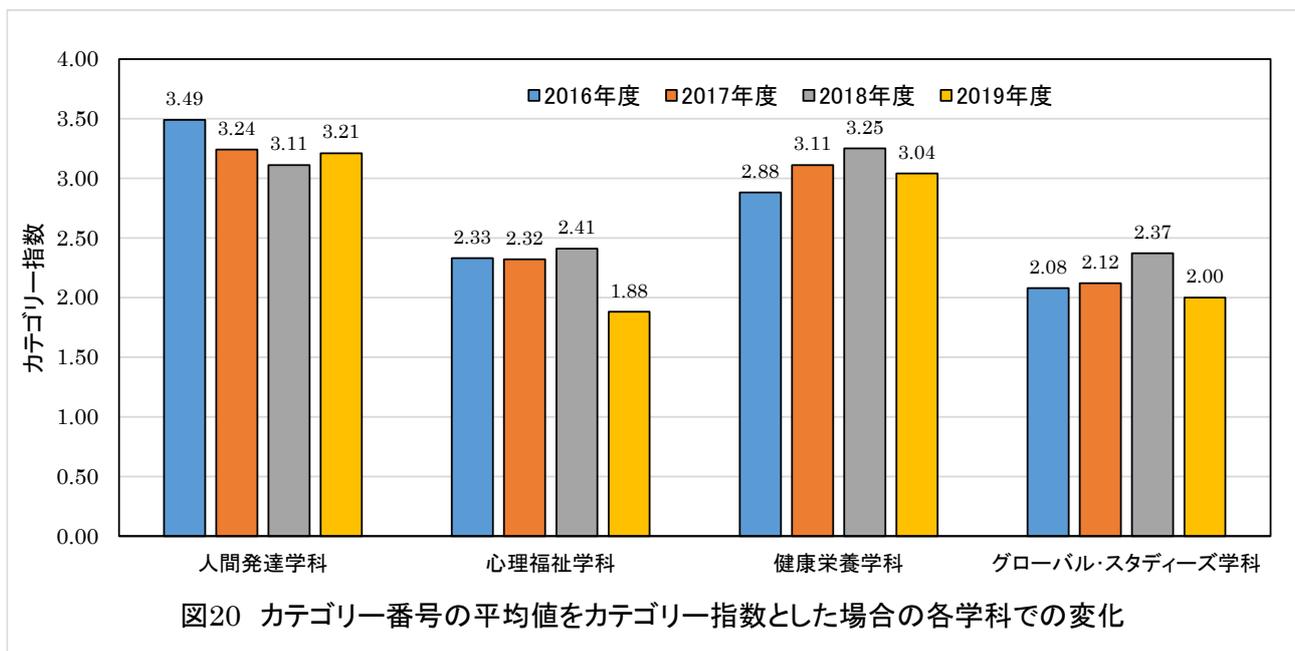




結果的に、本学の公務員採用割合は減少傾向にある。ディプロマ・ポリシーを達成した先には何があるのか、何を提供できるのか。自分の子を大学に行かせて勉強させたいと思う親の気持ちには、少なからず、いい就職先（安定した就職先）に就職できますように、といった願いがあるものと思われる。こういった思いも真摯に受け止めて、100%は無理でも、できる限り応えていこうとする姿勢のある大学であってほしいものである。国家資格を取得できるような学科は、その国家資格を皆が当たり前に取りれるよう、より一層学生を鍛えていかなければならないでしょうし、よりよい就職先に出会えるような指導もしていかなければならないでしょう。一方、G・S学科のように、これまでは花形の就職先として扱ってきた航空業界が、コロナ禍の影響で大きく変化してきている現在の状況下では、出口の目標を変えて指導していかなければならないでしょう。入口→教育→出口、これをきちんとやっけていこうとする姿勢こそ、大学が果たす内部質保証の改善への取組みそのものである。

### (3) カテゴリー番号の平均値をカテゴリー指数とした場合の各学科の年度別変化

さて、今回は学生の就職先のデータを大きく分類し、カテゴリー5～カテゴリー1の5分類を採用して、色々な見方をしてきたが、最後にカテゴリー番号の平均値をとってみることで分かることがあるかも知れないので、実際に調べてみることにした。ここでは、各学科の卒業生の就職先のカテゴリー番号



を平均した値を「**カテゴリー指数**」とよぶことにする。

各学科の年度別カテゴリー指数の変化をグラフ化すると、**図 20** のようになった。前述したように、学科で取得できる国家資格があり、その国家資格を取得して就職する、公務員となるケースの多い人間発達学科や健康栄養学科では、カテゴリー指数は高い傾向にある。一方、同じように取得できる国家資格があるにも関わらず、その国家資格を取得しないで就職するケースがやや多いと思われる心理福祉学科では、国家資格をもつ他の 2 学科と比べるとカテゴリー指数は低めとなっている。グローバル・スタディーズ学科では、教員免許以外の大きな資格はないこと、カテゴリー化が他学科と異なることなどから単純に比較はできないが、他学科と比べて公務員採用人数が最も少ないことが気にしなければならない点である。過去 4 年間で 4 名の公務員採用者があったが、3 名は教員採用で、1 名のみが事務職の公務員であった。G・S 学科において、教員採用を増やすことは簡単なことではないと思われるが、一般職の公務員採用であるならば、その採用数を増やしていくことは可能であろう。

#### **(4) まとめ**

就職といった出口問題も内部質保証の観点から重要な課題である。就職率だけでなく、就職質にも目を向けた対応が今後ますます重要になっていくものと考えられる。よって、就職に関する大学としてのビジョンを持たなければならないが、特に本学においては、公務員での採用者数を増やしていくことを目的に、年度ごとの数値目標を設定するようにしていきたいと考えている。

また、今回採用したカテゴリー化を精査しつつ、就職といった出口における成果の可視化も行えるようにしていきたいと考えている。